

---

# アイテム鑑定士の業務内容

冴野一期

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイテム鑑定士の業務内容

### 【Zコード】

Z0340Z

### 【作者名】

冴野一期

### 【あらすじ】

魔都ルーライン。その職人街で、小さな店を構える青年の物語。

この世界に満ちた概念を、大方知り尽くした男がいた。

「　峠越えは気分がいいな」

晴れた曇下がり。これから西に落ちていく太陽が、雲の波間に浮かんでいる。

春先の蒼天だつた。足下は、人が何百年もかけて踏みしめた畦道が続き、両脇には背丈の低い野草と、幾色かの花が咲きほこる。

「そろそろか」

空を見上げ、片手で陽をかざせば、一羽の鳥が目に留まつた。気持ち良さそうに眼下に広がる森へ降りていいく。その森から離れたところ、川の流れに沿つて街が栄えていた。

「さて……」

風が吹く。ざわざわ、野に生えた小さな花が種子を飛ばす。それもまた青空を昇つて、導くように街へ向かう。

「故郷は、少しあは変わつたか？」

男は前を向き、ふたたび歩きだした。

街へ至る道は、申し訳ない程度に均されていた。男の隣を、荷馬車が通り超える。色褪せた幌の隙間から、暗鬱とした瞳の少年少女が垣間見えた。

「……奴隸か」

足がわずかに止まる。

「最近、南の方で、農民による革命があつたな……」

なれば、没落した貴族の子供かもしれない。

苦いものを味わつた顔で足を進ませる。城壁の一角に辿りついたのは、先ほどの馬車が通り抜けた直後だつた。門番が振りかえる。

「ん、なんだ貴様は」

「普通の旅人だが」

鋼の鎧を着た門番は、男を疎ましそうに睨んだ。ジロリと眺めた後で、白銀の籠手に覆われた手を伸べてくる。返答の代わり、木製の割符を取りだし見せつける。

「関所もきちんと通つてきた。『魔都』に入ってくれないか?」

「そんな物はどうでもいい。銅貨一枚だ

「は?」

「最近できただばかりの法律なんだよ。『こちやんこちやん』抜かすな。代わりに一撃くれてもいいってんなら、釣りはいらんぜ?」

拳が握り締められる。門番は、たっぷりと贅肉のついた顎を緩め、卑下した。

「……わかった」

一拍の後に応じた。小さな革袋より、銅貨一枚を素直に取りだして払う。

門番の視線が、差し出した男の指先で止まった。

「おい、ちょっと待ちな

「まだ何かあるのか?」

「あるぜ、いくらでもな」

銅貨を奪い、ニヤニヤと、嘲りの色合いが増していく。

「今思い出したんだが、この魔都に入るには、持ち物を一つ置いてかねえといけねえのさ」

「……中々に斬新な法律だ」

「そうだろう。とりあえず、その指に嵌めた指輪を渡しな。見たらこう黄金だろ、そいつはよ

明らかに脅し文句。対し、男の口元にも笑みが浮かぶ。

「目敏い豚だな」

「あ?」

「確かに、こいつは貴様の命より価値がある」

「おい。指<sup>ご</sup>と落とされてもいいのか?」

「そうか

瞬間「ヒュッ！」と、風が切り裂かれる音がした。

門を抜け、男はふらふら、街を歩いていた。

空が雨雲に覆われはじめ、ひたひた、近づく雨の気配を感じじる。

「厭な気分だ」

太陽が、尾根の向こうに消えていく。辺りは急速に色濃く、夜の足音が近づいていた。その中であっても、喧騒あふれる声は騒々しい。確かに活気はあるが、派手な彩りの影にある貧富の差は隠せない。虫食い穴のように田立ち、匂つてくる。

「なにも変わっていないのか」

道を少し逸れてみた。「ここに満ちた路地を歩けば、

「…………して、やる…………」

黒ずくめの少年が、壁に背を預けて死にかけていた。腹部からドス黒くなつた血を吐きだし、どんより墨つた空を、一心に睨みつけている。

男はたいして気に留めず、横切りとする。

少年もまた、同じ言葉を続ける。

「…………殺して、やる…………」

呪詛の声。

ひたすら、ひたすら、呪つ。

男の足が止まつた。愉快そうに口端を歪め、正面から見下ろし言い切つた。

「おまえは、もうすぐ死ぬ」

ぴくり、と少年の眉が動く。瞳が苦痛に震えながらも、わずかに焦点が定まり、ギラついた表情で男を見上げた。

「…………死んで、たま、るか…………」

「無理だ。数えて百も経たなこいつに、おまえは死ぬ

「…………ッ」

血を吐いた。

それでもまだ飽き足らなこいつに、黒ずくめの少年は言靈ことだまを紡い

だ。

最期の一息まで、憎悪の言葉を、殺意をたっぷり吐き出した。  
なにひとつ、救いを求めなかつた。

呪つて呪つて、死んでいった。虚ろになつた瞳は変わらず、じつと男を見上げたまま。

「そうだな。この世界に救いは無いな」

空に浮かぶ暗雲の気配が、急速に広がつた。

世界を色濃く覆い、雷鳴が轟く。地上に落ちた雨を受け、男が笑う。

「少し、変えてみるか」

口端を吊り上げる。膝を折り、指輪を嵌めていた側の手を伸ばす。  
乾きつつある返り血が激しい雨で流されていく。

「俺の【力】を分けてやる。少年、足搔いてみせろよ」

言葉に呼応するように、黄金の指輪が輝いた。  
闇の中。指先にだけ、淡い光が満ちていく。

## 項目2・買い取りは安く、誠実に。

### 『アイテム鑑定士の業務内容』

かつて、魔都と呼ばれた強国があつた。高度な文明を誇っていたが、なんらかの理由によつて地の底へ沈んでしまつた街だ。それから長い時を経て、地上にも街ができるが、

古代の知識を求める者たちと、その知識を売り払い、富を求める者たち。

その場所はいつしか、もう一つの魔都『ルーアイン』と呼ばれるようになつていた。

ルーアインの目抜き通りの一角。

その路上では、自前の店を持たない流れの『冒険者』たちが商いを行つていた。中には市場の商人と変わらない声を張り上げる者も多い。

「さあ、見てつてくれよっ！　ここに並ぶのは、今しがた命がけで『迷宮』から発掘したばかりの　アーティファクトですぜえ！」

とりわけ声のでかい露天商がいた。

その声に惹かれるように足を留め、並ぶ商品を覗いていく客がいた。身形のいいのは大抵自前の店を構える商人や、王宮の『ギルド』に属する職人たちだ。しかし最も多いのは、迷宮に潜つて遺物を漁る冒険者だつた。

彼らは、決して街には馴染まない、特有の雰囲気を漂わせていた。

「もうちつと、まともなモンはねえのか？」

「いやあ、なにせ過去の遺物ですからねえ。見た目はちつとわりますが、王城のギルドで働く鑑定師ゲートアハーベンに見せりやあ、値も吊りあがるつもんでさ」

「なら、自分で持つてけや」

「いやあ、奴らの鑑定料は、バカ高いすから。その身銭が無えんす

わ」

「下手な言い訳しやがつて。テメーも冒険者だらうが。これが、ガラクタに過ぎねえことを知つて売りつけようとしてんだろ」

誰もが同じような反応をした後で、それから「ん?」と、鞘に入つた無骨なナイフに興味を示した。動物の皮で作られたらしい鞘を外すと、刃こぼれ一つない、漆黒の刀身が姿を見せる。

「おお、ダンナ、お目が高いつ！」

すかさず、露天商の男が押しまくる。

「それ！ 中々いい品でしょう。銀貨一枚でどうすかねつ！」

「いや、いい」

しかし客たちは、皆が得体のしれないなにかを感じ、即座に刃を戻して立ち去つた。

「……チツ」

客の後ろ姿を見送り、露天商が舌を打つ。

「やっぱ売れねえか。こんな演技の悪い代物はなあ……」

どのように角度を傾けても、一切の光を映さない漆黒の刃。

一滴の血もついておらず、刃こぼれも無い。それが逆に、いつそう不気味だった。

「やーれやれ……。アレから漁つてきたのは、やっぱマズかつたかねえ……」

「おい」

小声で愚痴をこぼした時だつた。入れ替わるように、買い物袋を抱えた青年が足を止めていた。

「それ、見せてくれるか」

「へ、へいっ、どれでもどうぞっ！」

「いや、お前が持つてるナイフだけでいい」

「こ、これですかい」

「ああ」

青年は、少しこけた頬と顎骨の線が良い、それなりに見栄えのする顔だった。髪と瞳は明るい茶色。身に着けているのは、簡素なシヤツの上に綿をつめた濃紺のベストだ。下も量産された革ズボンだが、足下は金属で補強したブーツを履いていた。

「……」

そして、目つきだけはやたらと鋭い。

モノ

クル

黙つたままベストのポケットから片眼鏡モノを取りだし、右目に被せる。

「貸してくれ。手に持つて見てもいいんだろ?」

手を出して受け取り、ナイフを抜く。何気ない一連の動作が、流

れるように素早い。

「兄さん、あんたも冒険者かい?」

「昔はな」

答え、他の客が難色を示したナイフを見る。

黒の刀身、続けて外された革の鞘もまた、隅々まで目を通していく。

「これ、どこで拾ったんだ」

「へ!?」

「ずいぶん染みついてる、と思ってな」

ぎょっとした様子で、露天商が目を見開いた。

「な、なにが……。つこてるんで?」

「なんだと思う?..」

反して青年の口元には、ニヤリとした笑みが浮かぶ。

「別に追求するつもりはねえよ。ただ、こいつは一級品だな。金属の打ち方を見ても分かるし、なにより『鞘』の方も文句なしだ。單なる薄汚れた毛皮に見えるが、わざわざこのナイフの為に作られた一品物だろうな」

「そ、そなん?」

「なんだ。何もわからないのか?」

青年が言えば、露店商が慌てて弁明する。

「……え、いや、まあ、」の下に眠る、古代都市に住んでた職人だ  
ら「うてのは……」

「ちげえよ。こいつは東にある異国の文字だ。刀剣を練成した技術  
にも、最近の手法が使われてる。間違つても古物じゃねえ」

「や、やたら詳しいな。兄さん、鍛冶職人か？」

「違う」

言つて、今度はナイフを陽にかざす。さらに様々な角度から検分  
した。

「 気に入つた」

静かな声とは裏腹に、鋭い瞳で、売り手である男を見据えた。

「 いくらだ」

「 へ？」

「 引き取つてやるよ。いくらだ」

「 あ、ああ……。んじゃ、銀貨一枚で」

「 ほらよ」

青年は腰元のポシェットから銀貨を一枚投げた。露天商は、両手  
の中に納まつたそれを見て、しばらく「ぽかん」としていたが、突  
然夢から覚めたように言い募る。

「 ま、毎度っ！ なんだよ兄さん。もしかして、グートアハテン鑑定師か？」

「 いや、王城お抱えの職人共とは無関係だ」

青年はナイフを腰のベルトに下げ、買い物袋を持ちなおした。

「 僕は自由鑑定士エル サーズだよ。職人街に店がある。鑑定したいモンがあれ  
ば持つてきな。迷宮のアイテム一点につき、銀貨一枚で引き受ける

ぜ」

「 な、なるほどなあ！ いやいや兄さんも人が悪いねえ。なんなら、

その短刀を鑑定

「 ノイツをどこで拾つたか、もう少し、根掘り葉掘り聞いてもいい  
んだぜ？」

「 ……あ、いや……。そ、そうだ、兄さんよ！ 自由鑑定士つてこ  
とは、師匠がいたりすんだろ？ ギルドお抱えの鑑定師はたつけ

えからよ！ よかつたら紹介してくんねえか

「今はいねえよ。店も、俺の名義だ」

「へえ！」

露天商は、感嘆と羨ましさの入り混じる声をあげていた。

「その歳で自分の店持つてんのかあ。兄さん、名前は？」

青年はほんの少し、口元を歪めた。

「ジーカルト・ワーグナー」

もしかすると、営業スマイルを意識したのかもしれない。しかしどちらにせよ、子供が慕うような笑顔では無かつた。

### 項目3・古物の鑑定と、旧来からの客応対について。

月明かりに照らされた職人街の通りは、しん、と静まりかえっていた。そのなかで、一軒だけ灯りのついた建物がある。見栄えよりも実用的な印象を放つ、無骨な赤レンガで出来た小さな店だ。正面に木製のプレートが下がり、閉店中だと告げていた。

勝手口を抜けた先、さして広くない室内の中央に、長机が置かれている。

天井から吊り下げられた電球の明かりが、ぼんやり届く。

「…………」「ミ」

ジークハルトは椅子に座り、手を動かしていた。赤い宝石が乗つた杖を置く。

茶色の短髪と同色の瞳。やたらと険しいその目を細めれば、ビックリ猫科の肉食獣を思わせる雰囲気が滲みでる。

「…………」「いつもゴリ」

白い綿の手袋をはめ、無言で、青い宝石を乗せた指輪を、ためつすがめつする。

その指先が不意に止まり、舌打ちをした。

「クソ。初見の客は信用ならねえな」

ジークハルトの右目には、昼間つけていたものと同じ、丸い片眼鏡<sup>モノクル</sup>が被せられていた。銀縁の外枠が、苛立つた内面に呼応するように光る。

「あの野郎。なにが伝説の妖精指輪だ。ホラ吹きもいいとこだぜ。指輪から魔の反応がぜんぜんしねえ。単なるクズ銀じやねえか」

両手を動かしながら、今度は青い宝石に注目した。

「こっちの【魔石】は本物みたいだが……」

慎重に、ゆっくりと、角度をズラしていく。指輪の青い宝石に注目すると、じんわり、右目に乗せた片眼鏡のガラスに、イメージが

浮きあがってきた。

「ぼつ、ぼつ、飛び散る、赤い鮮血の色。

すううーと、人の手を模したイメージが伸びてくる。

「ウゼン」

実在する己の手で払いのけると、イメージは霧散した。ひとつ溜息をこぼし、片眼鏡を外す。指輪は再び、なんの変哲もない銀の指輪に見えていた。

「どこの死体を漁つてきたんだか。良物は、あのナイフだけか」指輪を机上に戻し、傍らに置いてあつたマグを取る。中には半分冷めたコーヒーが残つていた。苦い顔を浮かべ、茶色い毛を搔きむしる。

「面倒くせえ」

改めて、作業机の上を見渡した。

転がるのは革の鞘に入った短剣を除くと、赤い宝石を載せた杖、目を引く青い宝石の指輪が三つに、黒い水晶で作られたネックレス。そして極めつけは「カタカタ」音の鳴る鎖帷子だ。

「つたく。王城の鑑定師ゲートアハテンが拒否するような、面倒なアイテムばかりじゃねえか。まとめて銀貨六枚で引き取らせてやる」手にした「コーヒーを、ぐびつ、と飲み干したとき。

カラーン、コロロン、カララン。

澄んだ鈴の音が、薄明るい店内に響いた。一人、男の客が入ってくる。

「ジャマするぞ」

背の高い、青空の髪と瞳を持つ、一枚目の中だ。黒衣のロングコートを着て、足は膝下まである濃紺のブーツを履いている。腰元には一振りの長剣をたずさえていた。

「相変わらず仕事熱心だな、ジーク」

「……エリオット」

「なんだ？ 嫌そうな顔をされる覚えはないぞ」

「表の看板が見えなかつたのか。店はとつくなつてんだよ」

「そつか。暗くて分からなかつた」

さらり、と見栄えのいい顔が笑う。

エリオットと呼ばれた客は、木目の床を進み、客用の椅子へと腰かけた。

「仕事熱心なおまえに、いい話を持つてきただぞ」

「頼んでねえ。それに今は、面倒事を聞いてる暇はねえよ」

「鑑定中か。相変わらず、面倒な【属性】が付与されたアイテムが並んでるな」

エリオットが、先ほどまでジークハルトが鑑定した指輪を取りあげる。

宝石から赤い【霧】が立ち込めた。再び人間の腕が伸び、エリオットの手に食らいつかんと迫るも、

『【呪】を知る我、命ず。』<sup>デイス</sup>・  
属性付与<sup>エンチヤント</sup>『  
』<sup>ベイブ</sup>

ささやくと、赤い【霧】は弾かれたように消えてしまう。続けて、他のアイテムにも手を添えて、同じ言葉を告げていく。

「ふん。【魔】が外れたら、ただの粗悪な指輪だな」

「おい、俺が預かってる商品に、勝手な真似してんじゃねえよ」

「べつにいいだろ。持ち手に審意を与える【属性】が付与された『呪い物』を、好んで引き取るやつもいまい」

「……なら、ちょうどいい。ここのアイテム、全部【解除】しやがれ」

「おい、こつちは客だぞ」

「つるせえ。やれ」

この世界に満ちた【魔】と呼ばれる力。

万物、ありとあらゆる【属性】のイメージに、別のイメージを付与し、本質を操作、または変貌する力。

【魔】が秘められた有用なアイテムは、人々から「アーティフアクト」と呼ばれ、そうでないものは「呪い物」などと呼ばれていた。

エリオットは「人使いの荒い」などと愚痴をこぼしながらも、素直に呪いを解いていく。

黒い水晶のネックレスと、さらに『カタカタ鎌帷子』も黙らせたところで、

「さて、後はそのナイフか……」

残るのは、革の鞘に入っていた短刀だ。

手を伸ばすと、先にジークハルトが取りあげた。

「こいつは必要ない。今朝、俺が市場で買いとつてきたもんだ」

抜き放てば、黒い刀身が現れる。

ジークハルトの片眼鏡アーティファクト越し、刀身の中央に【歪んだ渦】が見え隠れする。エリオットの口元からも「ふむ」と声があがる。

「いっぽしの冒険者なら、そいつに秘められた【魔】に警戒しそうだが」

「単なる『呪い物』と、純度のいい【魔石】の違いが見抜けなけりや、鑑定士なんざやつてねえよ。おそらく、これを作った職人はよっぽどの腕利きだぜ」

「何故わかる?」

「本体に、一切の刃こぼれも血の跡もついてねえ。鞘は使い古された感があるのに、刀身が真新しいってのは妙だろ」

「そうか? 普通に研いだんじゃないか?」

ジークハルトが首を振る。

「この『いかにも怪しいです』って刃を研いだとすれば、普通に实用性があるってことだ。それに、もう一つの可能性があるだろ。このナイフがそもそも『直接斬りつける用途に使われてなかつた』つてな

「なるほど」

エリオットが、会得の言つたという感じに頷いた。

「特定の【魔】を発動させるべく作られた、触媒用の『クリスナイフ』か」

「そういうこつた。片眼鏡で鞘の方も見たら、そっちにも【魔】の反応があつたんでな。特別な【魔石】は、作り手の意識で、姿も、形も、色も変える。だが【本質】を見抜く片眼鏡と、質量だけは誤魔化せねえ」

片眼鏡を載せたジーケハルトの瞳が、ナイフの鞘を見据える。一見して動物の革に見えるそれは、刀身と同じ、漆黒の色合いを映し出していた。

「作り手の遊び心だ。鞘、刀身、握り手に至るまで、すべてが【魔石】で出来たナイフだ。革の鞘を手にしたときの重さによる違和感と、抜き身にした時の真っ黒な刀身のせいで、呪われてるようだ勘違いすんだろうぜ」

「見事な鑑定だ。いくらだつた？」

「銀貨一枚」

ジーケハルトがすかさず答えると、エリオットが噴き出した。「いい買い物をしたなあ。金塊に等しいお宝を、銀貨一枚で買い取つたか」

「宝が腐つてんのを回収して何が悪い？」

エリオットが、くつくつと、心底楽しそうに笑う。端正な表情を緩め、口端を吊りあげる。

「たいした奴だ。やはり、場末の自由鑑定士にしておくには惜しい」

「そいつはどうも」

「よし、そろそろ仕事の本題に入るか」

「うるせえ、引き受けねえって言つてんだろが」

ジーケハルトの睨みを笑つて受け流す。

「人に解呪を任せておいて、それはないだろう。いいから話だけでも聞いてくれ」

微妙に下手になりはじめた。

「今回の仕事は王城から来たものだ。もう一度言うが、損は無いぞ」

「……城からの依頼？ 危険はねえのか」

「当然ある」

「帰れ。死ね」

ジークハルトが心底嫌そうな顔をする。ナイフを引っ込め、睨みつけた。

「場末の鑑定士の店に、厄介な依頼持つてくんじゃねえ。テメエんとこの『ギルド』で片しどけ」

「ウチは隠密行動に向いてる人材が少なくてな。できれば、あまり顔が知れてない奴で、なおかつ腕利きが好ましいわけだ。なつ、頼む、ジークハルト」

「うるせえ。つーか、なんで王城から仕事預かってくんだよ。テメエは元々、ただの冒険者だろうがよ」

「ふつ。それだけ、この俺の名が売れてきたといふことだなつ」

「アホが。言いよつに使われてるだけだぜ……」

ジークハルトは、そつと腹部を抑える。

じわっと、わずかに古傷が痛んだような顔をした。

「悪いが、帰つてくれ。俺は、貴族の犬になるのは『めんだ』  
本気で苛立つ言葉を耳にすれど、エリオットは引き下がらなかつた。

「便利屋のように使われることに辟易してゐるなら謝る。だが事実、お前の力が一番高いと確信している。それに俺は、信頼を切り捨てるようなバカとは違うぞ」

懐から小さな袋を取りだし、放り投げる。

中に詰まっていた金貨が、机の上に広がつた。

「前金で二十万だ。質素に暮らしていれば、三月は食つていけるだろ？」

「だから……」

眉間に指を添え、ジークハルトは、深々とため息をこぼす。

「俺は、只の鑑定士だって、言つてるだろうが」

「謙遜するな。鑑定だけじゃないだろう。鍵開け、罠外し、古代知

識に、異国の言語。ついでに薬物調合とかな。おまえなら、今でも一流の冒険者としてやっていけるぞ」

「引退済みだつてんだよ」

市場価値の高い金貨を取りあげ、指で弾く。手に落とし、純度を確かめるように軽く噛んだ。

「……ま、金に貴賤はねえ、か」

「その通り」

「言つてみる。一万上乗せで、話ぐらには聞いてやる」

「そうこないとな」

エリオットが平然と、新しい袋を取りだし乗せた。そして、真顔になる。

「事のはじまりは先週だ。南西にある森で起きた噂は聞いてるか?」

「知らねえよ。ここから南西の森つーと……」

「【魔】に優れた、『エルフ』の一族が住んでる森だ」

言葉をひとつ区切る。

「先週から、エルフ族との連絡が途絶えているそうだ。おかげで、連中の森から取れるアイテムの流通が無くなり、王城は大騒ぎさらしいぞ」

「そのアイテムつてのは?」

「へ森の靈薬くだ。消費した【魔】を回復させる、飲み薬だな」

「ああ……。王城が販売を独占してるアイテムか」

「そうだ。そのアイテムの流通も途切れている。エルフ族はおそらく、ほとんどが死に絶えたといつ見方になつてゐるらしい」

「へえ。

ジークハルトは、どこか気のない様子で返事をした。

「それでだ。この街で、明日の夜に盗品が流される情報を掴んだのが、つい昨日だ」

「盗品?」

「エルフ族のへアーティファクトへが売りに出されるらしい。売り場に潜り込めば、一族が滅びた元凶が掴めるかもしれません」

「流してた連中の正体は分かってんのか？」

「確証はないが、十中八九、この国の貴族だ」

「あー、腐つてんな」

唾を吐き捨てるよつて告げ、後ろ髪をかいた。

「自らの不始末が処理できず、テメエのギルドに依頼が来たわけだ」

「そういうことだ。腐った貴族の連中に、一泡吹かせてやるもの面白そうだと思わんか？」

「……悪くねえな」

ジークハルトが応じれば、蒼の双眸が深く頷いた。そりに、懐から一つの仮面を取りだして置く。顔の上半分を覆う、田と口元のところだけ開かれた、白いオペラマスクだ。

「なんだそりや？」

「これが、売り場に行くための招待状らしい。手にとつて見てくれ」  
ジークハルトは片眼鏡モノクルを装着し、受け取った仮面を観察した。額に触れるところを撫で、表情を歪める。

「気づいたか？」

「……詳細は分からねえが、わずかに【魔】を感じる。催眠系か？」  
「恐らく。内側に【】を驕らせる【属性】が籠められているはずだ。あとは……」

エリオットが、椅子に深く身体を預ける。少し言葉を濁して告げた。

「オーラクションの客は、男に限定するらしい」

「それがどうかしたのか？」

「確証はないが、エルフの生き残りが、売りに出されるらしい」

「クソだな」

「同感だ。さて、そろそろ返事を決めてもらえるか？」

ジークハルトが片眼鏡を外す。茶の短髪と同じ瞳を閉じ、思案に耽る。

壁際に置かれた棚上。時計の秒針が一週した。

「 いこい、引受けたやがる  
ゆくつと瞳を開く。」

#### 項目4・悪意と殺意の田代を。（前書き）

一部、倫理感に外れる描写があります。

## 項目4・悪意と殺意の目利き。

催しは、月の浮かばぬ深夜に開かれた。

大通りから離れた裏路地の、朽ちかけた屋敷。正面の門は錆びついて、建物自体も随分と塗装が剥がれ落ちている。  
もうずっと、人の手が入り込んでいないように思える有様だった

が、

「会場は二階か」

注意しなければ見落としてしまう程度の明かりが、一箇所からこぼれている。

「慣れないもんを着ると暑苦しいな」

ジークハルトは、黒一色のコートと、白のオペラマスクをつけ、錆びついた門を単独で通り抜けた。続く中庭は雑草が伸び、石畳みは割れている。しかし人が通るであろう枯れた噴水の周辺は、確かに人が通ったと思わしき足跡が残されていた。

室内に入つても同様だ。消えるか、消えまいかといった風前の灯火が、二階へ続く。

「.....」

辿り着いた部屋。十を越える、仮面の視線が向けられる。

室内はテーブルクロスを被せた机だけがあるホールだった。ただし内装は、急ぎ整えられた様相で、埃をかぶつたシャンデリアの代わり、【魔】を付与された燭台がそれぞれのテーブルに灯っている。床の赤絨毯はところどころ糸が解れたまま。両側の窓は、分厚い黒の布きれで覆われているものの、ジークハルトが外から見たとおり、僅かに部屋の輝きを漏らしている。

杜撰すさんだな。

思いながら、まっすぐ、部屋の中央に進んでいく。

蒐集家たちは、本来の目的とする物へ視線を向けた。

それぞれの机には、強奪されたと思わしきアイテムが並ぶ。指輪やネックレスの装飾品、礼拝に使われていたらしい聖杯などの呪具、さらには木製の弓や杖までも。強奪された時についたのか、血の跡がこびりついた物も少なくなかつた。

「……よい、実により。迷宮で取れるアイテムとは、また少し性質が異なるようだ」

一人の仮面の男が咳いた。

ジークハルトもまた横から覗き込んだが、一瞥をくれただけで、別の机に向かう。

贋作かよ、と小声で咳き、続けて向かつた席では、三人の『仮面』が、密やかに笑いあつていた。

「いやはや、驚きました。今回はこちらに来て正解でしたよ

「はは、本当に」

内二人の声は、いくらか皺がれた男の声。

残る一人は、この場で唯一に黒のドレスを着ている。

「ご満足いただけて、なによりです……」

真つ赤なルージュが弧を作り、妖艶な雰囲気を醸しだす。

「本日取り揃えた商品は、どれも一級品ばかりですが、さらにこの後、とつておきの商品が控えておりますので……」

「ほお、それは楽しみだ」

「まったく、なにが出てくるのやら」

物欲をたっぷり孕んだ声。そこへ気にせず割つて入り、宝石で彩られた髪飾りを、ひょいと摘みあげる。

「…………」

ジークハルトは、手の内で髪飾りを転がした。三つの仮面がその様子に釣られていると、

「これは悪くねえな」

同じ調子で机に戻し、それからまた、足早で去つていく。

「……なんでしょう、今のは。乱暴な」

「随分若そつな声でしたなあ。ビニジヤの成り上がりの息子でしょ」「違ひない」

仮面の男らは嘲笑し、再び談笑に戻る。

ただ一人、ドレスの女だけが、その行動を追っていた。

すべての机を見て回つたところで、ジークハルトは一つ息をこぼした。

口元に手を添えて、さじどりあるか、といった感じに立ち廻へして、いた時だった。

「 皆さま、

ドレスの女が、部屋の中央で声をあげた。一同の仮面が、すべてそちらを見る。

「本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。これより最後の一点をお披露田したく思います。あちらを、じ覽くださいませ」

ホールと廊下をつなぐ扉が軋んだ。

ジャランッと、硬質な部屋の中に響き渡る。その先には、

「ひ、ぐうつ……！」

少女がいた。

成人した男たちの、胸元に届くかという大きさ。粗末な布切れと、首輪をつけて、強引に歩かされてきた。

「いひやいつ！」

長い金髪、森の新緑を思わせる翠眼、薄いクリーム色の肌、そして特徴的な、長く尖つた両の耳。幼くも端正に過ぎる顔立ちで、頭にはまばゆく輝く精銀の髪飾り。

エルフの少女の首輪を率いて来るのは、狼の顔立ちをした、一本の足で歩く毛むくじやらの【亜人】だった。赤錆び、無骨な骨で出来た鎧を着て、ひたひたと素足で向かつてくる。

「コ、コボルトッ！？」

「な、なんなんだ、おいつ！」

仮面の男たちが一斉に身を引く。

「ボルトが「ルル……」と犬歯を剥き出し、集まつた男たちを睨みつける。ギヂッと歯を鳴らし、手にした鎖を投げるよつと放つた。

「あ、ぐつ！」

エルフの少女が床に転がされる。

ドレスの女が歩み寄り、膝を折つて手をかけた。

「みなさま、こちら、純血エルフ種の生き残りであられる、リーアヒルデ王女です。フフ、最低落札価格は、一千万から如何でしょうか……？」

「ひつ……」

上向きにされた王女の顔。

見る者にとつては、嗜虐志をそそられる香りをたつぱり孕んでいた。男達は魂を抜かれたようにリーアヒルデを見つめる。一人を除いて、女の唇が何事かを紡いだことに気がつく者はいなかつた。

仮面に秘められた【魔石】が呼応する。その力を満たしはじめる。「……は、はつ、はははははははは。これは、いやはや、おもしろい……」

「実に、実にいいでは、ありませんか、なあ？」

「やつ！」

不穏な気配を感じたリーアヒルデが、くしゃと顔を歪めた。男たちの眼下から逃げようとするも、「ボルトが鎖を引けば、再び転がるだけだ。

「けほつ……」

苦しげに咳きこむ声に対し、男たちが嘲笑う。

「ひははつ、愉快な催しですなあ。低値で入札をいたしましょうか」

「あー……。では千一百」

「千三百で……」

「いやいや、過去の繁栄とは儘きものですねえ」

仮面に付与された【魔石】が理性を溶かす。値は天井知らずに伸びていく。

「さて、みなさま」

「ひつすらひと、女の口元に笑みがこぼれた。感情のなかつた紅い瞳に、ぼうつと怪しげな色が浮かぶ。

「本日は納得いくまで、直々に、商品をお確かめいただけることを推奨してまいりました」

そう言って、液体のたゆたう小瓶を取りだした。リーアヒルデが全身をふるわせ、ぽかんと口を開いたまま動きを止める。

「【水】をさしあげましょう。王女さま」

口をこじ開き、小瓶の液体を強引に流し込む。

「じ気分は如何?」

「……………あう」

リーアヒルデは、ぼうつと気が抜けたように宙を見上げていた。魔法にかかつたように、首を傾げてみせてから、それから自分を見下ろす、情慾に染まつた視線と向き合つた。

「……なんだ、あの【水】は」

あらかじめ【魔石】を取り除いていた男だけは冷静だった。そして、その思考を遮るように、ドレスの女が近づいた。

「貴方は、入札に参加する気がございませんの?」

「ああ、結構だ。テメエが持つてる薬の成分と、効能のほうに興味があるからな」

「残念ですが、こちらに關してはお答えできません」

「そつかよ、なら、自分で調べるとするか」

口元が吊りあがる。その手に、半分ほど中身の減つた小瓶が踊る。

「なるほど? 麻薬といつよりは、【魔】に起因する成分が強いようだな」

ふたたび手に落ちたとき、女が短い悲鳴をあげていた。

「いつの間に!？」

「手癖が悪いのが、売りの一つでな」

平然と囁く。小瓶をわざとらしくスースの内にします。

「……お密さま、無事にお帰りいただけなくなりますわよ?」

「最初から期待しちゃいねえさ」

「あー、そう?」

女が小さな笛を取る。音の無い響きがしたのと同時、ホールと廊下を?ぐ扉から、武装したゴボルトたちが集団で現れる。

冷酷に、ドレスの女が告げてきた。

「まったく、困ったネズミだわ。増えるまえに、駆除しておかなくちゃねえ……」

「同感だ。もう遅いけどな」

女の言葉を制す。

手首の裾から、鞘に収まつた漆黒のナイフを抜き放ち、床上に突き刺した。

『【時空】を知る我、命ず。> 彼方へ通じる扉、此処に生ぜよ』

## 項目5・正当防衛の際に関する事柄。

呼応する。

漆黒のナイフの刃先が煌き、言葉に秘められた概念イメージが展開。

ナイフの上空が揺らめくと同時に、声が落ちてきた。

「遅かつたな、ジーク」

そして、女の言うネズミは、颯爽と現れた。

ブーツの先で一步、韻を踏み、片膝をついた後に立ちあがる。身につけた衣服は黒づくめ。蒼髪・蒼瞳の若い男。腰に帯びた長剣とはべつに、持ち柄のついた短刀を一本握っていた。

「死んだかと思つたぞ」

「金を貰つまでは死なねえよ」

「ははっ、お前らしい」

エリオットが口端を緩め、手にした短刀を一本、投げてよこす。

「首尾はどうだ？」

「エルフを狂わせた元凶らしい薬物は回収した。詳細はその女が知つてそうだ」

「上出来だ。あとは片付けるだけか」

ジークハルトが短刀を抜いて構えると、エリオットもまた、輝ける白銀の刃を現し、一步距離を詰めた。

「ご婦人、抵抗がなければ痛い目にあわなくて済みますよ」

見栄えのする一枚目の顔立ちが、いつそ清々しいほど、爽やかに笑う。

さりに一步。黒ドレスの女が気圧されたように悲鳴をあげた。

「そ、その男を止めなさいッ！！」

武器を手にしたゴボルトの一体が、忠実に襲い來た。間合いに入る。やや赤錆びた感じのする片手斧を落とす。ざつくり。簡素な手応えは、真っ赤な絨毯を裂いた音。

「おまえは、まあ、死んでおけ  
白刃による一閃。残像に近い影が浮く。  
ドッ。

手首を斧ごと斬り払い、続けて首まで跳ね飛ばす。  
血飛沫が吹き荒れ、鮮血が舞う。  
頭が勢いよく回転し、ゴツ。と音を立て、天井にぶつかった。  
落下する。

碎け、脳髄を撒き散らした頭部。異臭が漂う。首なしの身体も傾  
れ、ゆらりと倒れた。

「しん……と静まり返った場。朗々と響く、エリオットの声。

「さて、次の相手は？」

斬り殺した死体を足蹴に。

瞬間、獣たちの怒号と、男たちの悲鳴の声が、

『ウ、オアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！  
！！』

折り重なる。正面左右より一体。後続からも迫り来る。

「ハハッ！ 生憎と、犬畜生とダンスを踊る趣味は無いんだがなあ  
ツ！」

鮮血をこびりつかた表情のまま、楽しげに一閃。斬り返す勢いで  
もう一閃。亜人の死体がまた増える。

同時に攻めていたのは残る一体。本能で悟つてか、初めて怯み、  
そして影のように近づく男に気づかなかつた。

『【炎】を知る我、命ず』

ジークハルトが【魔】を謳う。

短刀の柄にはまつっていた、赤い【魔石】が輝いた。

『刃にその力宿し、> 爆ぜ、散じるッ！ <

呼応する。

短刀より【炎】が舞いあがり、火花と化して爆散。銳利に研がれた刃が一本、コボルトの肉と骨、さらには粗悪な革鎧ごと食らい尽くす。

「ガ、ア、アギイイイイ、ツ！…」

気が狂つたような咆哮をあげ、手にした斧を振り上げるも、「おせえよ」

斧が落ちる前に、短刀が、腹を斜め十字に斬り裂いた。

血肉が一瞬で焦げ、骨が碎ける。くすぶる音と匂いが立ちこめ、絶命した。

呼吸をいくつも終えないうちに、襲いかかったコボルトの死体が合わせて四体。

二人は無造作に剣を振るい、向き合つた。

「相変わらず熱い殺し方をするな。ジーク」

「つるせえ。そっちこそ少しは加減しろ。俺の服にまで返り血つけんじやねえよ」

「実は最近、書類仕事が多くてな。身体を動かすのは久しくて、」

エリオットが笑いながら、屍を乗り越える。

「歯止めが効かん」

ひゅうつ、長剣が風を斬る。嬉しそうに笑い、さらに一步。残るコボルトの進撃が止まつた。敵わぬと知つたか、恐れたよう

にドレスの女を見た。

「……な、なにをしているつ！　いけつ！　いきなさいつ！…」

命じ、女は単独で逃走した。余裕などない。必死に、息荒く、廊下と繋がる扉を開けた。

その瞬間、

「はい、ごめんなさいね」

「ぐ、はツ！…？」

後ろに吹き飛んだ。ドレスの女を蹴り飛ばして入ってきたのは、

紫色の髪をなびかせ、軽装の防具を身につけた、褐色肌の美女だった。追い討ちをかけるように踏みつけ、にっこり笑顔で言いきつた。

「動くと潰します」

場は一瞬で決着がついた。残る「ボルトもすべて物言わぬ屍と化し、ジークハルトを除いた男たちは、仮面を外され一堂に集められた。ドレスの女もまた、身動きできぬよう縄で縛りあげている。

「エリオット様」

「どうした？ フイノ」

現れた美女は、なにかに気がついたように興奮して、耳に両手を添えていた。

「……外を見張っていた姉様より【声】が届きました。周辺に危険は無いとのことで、まもなくこちらにて合流されるそうです」

「そうか。『苦労だつたな』

「……おい……貴様つ！ おいつ！」

「ん？」

仮面を外された男たちが、緊張に耐え切れなくなつたのか、エリオットを指さす。

「きつ、貴様らは、何者なんだッ！」

「そうじや、ワシを誰だと思っておるかアッ……」

「……やれやれ。フイノ、説明してやれ」

「は」

命じられた女性が前にでる。一枚の書類を取りだして、書かれた内容を宣言する。

『 依頼者　：ゲイルフリート・トラバント・フォン・ノインス

依頼対象：冒険者ギルド』——ベルンゲンの指輪

および『ギルドマスター』エリオット。

依頼内容：魔都にて、近々に開かれる、

ブラックマーケットの制圧・殲滅・実行者の逮捕。

そこで売買されるであろう、エルフ族の秘法の回収

を命ず

その内容は、場にいた男たち、全員を凍らせた。

「……こ、国王、だと……？」

「はい、直々のご依頼ですよ。そういうわけで、どいてください、ねつ！」

「ぐふつ！？」

フィノが男たちを遠慮なく蹴り飛ばした。突き進み、その奥で呆然とする、エルフの王女の元へ歩み寄った。膝を曲げて、頭を撫でる。

「ごめんなさい。もう、大丈夫よ」

金の髪、翠の瞳、粗悪な服のあちこちが破れた姫君を、優しく抱きしめる。

「…………ふええ…………」

弱々しい声と共に、じわり、と涙が浮かぶ。

つうつと、頬を落ちていき、それから両手を伸ばして抱きついた。

## 項目6・支出は、常に不足の事態を考慮する【J】

如何に優れた財宝でも、心から欲し、求める者の手に届けねば輝くことはない。財宝に価値を持たせるには、正しく、宝の真贋を見極める手が必要だ。

職人街の一角にある、小さな鑑定店。

若き店主ジークハルト・ワーグナーは、その手の一つだと自負している。

「……ふあ

昼前、眠たげな欠伸を浮かべて、ジークハルトは部屋の扉を開けた。コーヒーを入れたマグを手に、整然と物が置かれた店内を歩く。表玄関の鍵も開け、看板を『営業中』へと裏がえして部屋に戻る。昨晩に着ていたスーツ姿ではなく、量産品のシャツに黒のベストを重ね着して、下は作業ズボンというラフな格好だ。

「飯は……。後でいいか」

少し寝癖が残った茶髪をかきつつ、壁にかかった時計を見て椅子に座る。コーヒーのマグを傾けると、熱くて苦い味わいが、口の中いっぱいに広がった。

「さて、仕事だ」

手袋を両手に嵌め、右目<sup>モノクル</sup>の上に片眼鏡を乗せる。鑑定するのは、昨晩ドレスの女から盗んだ薬の小瓶だ。透明なガラスの内側に漂う、なんらかの【水】を見据える。蓋を開き、手で扇ぎながら慎重に匂いをかぐ。

「無臭か。ただの水つてこたねーよな」

昨晩、この水を飲まされた姫君は、まるで洗脳されたかのよう、ぽんやりしてしまっていた。

「……まあ、口にさえ含まなけりや大丈夫、か?」

あとはじつと、片眼鏡越しに向き合つ。すると道具に秘められた【魔】が呼応し、【水】に秘められたイメージをジークハルトに伝

えてくる。

液体は次第に血のよう「赤く染まつていぐ。赤い色は、使用者に對して害意を与えるとする意味合いが強い。

「毒か、あるいは一種の媚薬か」

思考を続けながら見据える。

「エルフは【魔】に強いはずだしな。精神を惑わし、乱される状態にはなりにくいはずだ。それなら、エルフに特別な効果をもたらす薬つてこともある、か……？」

あきらめず、さらに赤くなつた液体と向き合つ。無味無臭で、成分を詳細に確かめられない以上は、片眼鏡の力だけが頼りだつた。

「……ん？」

ジークハルトが顔を近づける。【魔】が込められた片眼鏡へと、一心に意識を費やせば、小瓶の中央に【渇】が巻く。

「……なんだ？」

【白い風】のイメージが、小瓶の口元へと吸い込まれ、そのまま【渇】へと飲まれていった。

「こっちのイメージは……。俺の、片眼鏡か？」

解明する、明らかにする　白。

未知の物を究明したときの開放感　風。

それが小瓶の中に吸い込まれてゐる。と理解した時に、不意に視界がぼやけた。正しく言えば、水が赤く見えなくなつた。

「なつ！？」

何らかの【魔】が、片眼鏡に影響を及ぼしてゐる。慌てて小瓶の蓋を閉ざしてから、再度凝視する。だが一切の反応が消えていた。片眼鏡に秘められた【魔】が消えたのだ。

「おい……」

試しに他の鑑定済みのアイテムを見るも、まったくイメージが浮かんでこない。

「…………嘘だろ？」

呆然としつつ、ジークハルトの頭脳は働いていた。目の前にある

【水】は乾きを癒すためのものではない。あらゆる他より【魔】を吸收すべく、本質を【逆転】させられた液体だった。有用性など一切あらうはずもない。

「クソヅ…」

アーティファクトは総じて高価だった。品によつては家が一つ建つてしまつほどだ。ジークハルトの片眼鏡も安くはなかつたし、修理をするには、専用の付与師エンチャンターと呼ばれる職業が存在するのだが、その料金もまた高い。

「ふう」

大きくため息をこぼしたジークハルトの口元には、無意識らしい笑みが浮かんでいた。しかし、鋭い瞳だけは笑つてない。小瓶を掴んで振りかぶる。手から飛んでいこうとした。

『短氣は損ハラハラじゃぞ』

しかし、寸でのところで動きが止まつた。

薬ビンを投擲しかけた斜線上。棚の近くに、一枚の老人の肖像画が見えた。

三角帽子とローブを身に着けた格好。その手にはビールジョッキ。顔はやたらと赤く、右下には小さなサインで『ワーグナー』とあつた。

「クソジジイ」

肩の力を抜いて、手にした小瓶を机に戻した。何気なく指折り数えると、

「もう、四年も前になんのか……」

畳を過ぎた空は、ほんの少し、雨雲が浮かびはじめていた。

窓の外を見つめながら、ジークハルトの右手は腹部に添えられる。

若い店主の顔に、じわりと、古傷が痛んだよつた表情が生まれていた。

項目7・「己の親は選べぬが、己の歸丘は選ぶべし。

\* \* \*

ガキには過ぎた金だらう。

依頼主であつた王城の騎士に裏切られ、路地裏で腹を刺された瞬間、哄笑するような笑い声が降ってきた。

殺してやる。確かにそう言つた。しかし両足はぐらついて、機能を失つたように倒れ込んだ。ちょうど遠くから雨の音が聞こえはじめていた。

ふたたび目を覚ましたのは、月が浮かぶ深夜だ。気を失つていた間はずつと、ドブネズミのように雨に打たれていたらしい。ゴミの入り混じる腐臭が鼻をついた。ハエも集っていた。荒れた石畳みの地面には、いくつもの真新しい水溜りがあつて、夜空には綺麗な星が映つている。

「……う」

顔の側に飛びまわるハエを追い払おうと手を振れば、ジャラと鳴る袋が落ちた。

開いてみると、奪われたはずの金貨が丸ごと入つていた。

「……？」

眉をしかめ、刺された腹部に手を添えると、凝固した血液が剥がれ落ちる。傷口は綺麗に塞がれているが、手当てをしたらしい痕はない。

「なんなんだ……？」

少年は首を傾げた。いっそ、親切な神様でも通り過ぎていったのか。とさえ思つた。

「……はつ」

くすんだ笑いがおちる。神様、ねえ。

笑えば、身体の奥底から熱が滾るような感覚を覚えた。心臓に手

を添えると、ざくざく、ざくざくと、自然に脈を打つ。盛大に腹の虫が鳴いた。

「なんか食い行くか」

少年は、ゆっくりと立ちあがつた。歩き出す。

表通りに出てから、馴染みの安酒場に入らつとした時に、

「少年、一杯おしつてくれんかの～」

かけられた声に振りかえれば、そこには妙ちくりんな老人がいた。ボロのローブを着て、頭には不思議な尖がり帽子を乗せていた。命があつたせいで、気持ちが楽になつていていたのかもしれない。言われた通りに箸つてしまつた。

少年が馴染みの安酒場に踏み入ると、酒ビンを持ち、手をあげて叫ぶ声がある。

「よお、ジークぅ！」

「……ジジイ」

「嫌そうな顔をするでないわ。」いつかに来て、いつぱに付き合ひついつ！」

「つっせえ」

無視してカウンター席に座ると、勝手に隣の席にやつってきた。ジークハルトの背中を、ワーグナーと名乗つた老人が景氣づけるように呟く。

「なにしやがる…」

「怒るない。本日も講義をしてやう。テーマは『マナ・ポーション』『じゅ…』

「……はあ？」

「賢者の助言をタダで聞けるとは、おぬし、運がええぞお～

「頼んでねえ。つーか誰が賢者だ。この酔っ払いが

「では、年寄りの長い話、はじまり、はじまりじゅ…」

「聞けよ…」

ワーグナーはまったく気にせず、好き放題に話していく。ジーク

ハルトは相槌を打つ代わりに、舌打ちを一つくれてやる。

「……メシがマズくなる。マスター、鶏の手羽先を丸」と一つくれ

「ほお、羽振りがええのう」

「うつせーな。昨日拾ったアーティファクトが、よつやく換金でき

たんだよ」

「おおう、そりやあめでたいの～。で、どれぐらいの儲けになつたんじや？」

「答える義理はねえ

「なんじや、ケチいのあ」

ワーグナーは言つて、ジールジョッキを、ぐびっと煽つた。

「ふつはーい。んでは講義をするかの

「必要ねえ

「なり適当に聞き流しとけい」

「チツ」

ワーグナーが酒ビンを煽る。ジークハルトは咥えていた鳥の骨を吐き飛ばした。

「マナ・ポーションは大変貴重なアイテムじや。今では、精霊の靈薬くなる愛称で、王城のギルドが販売しておるがの」

「一瓶で十日はメシが食えるな

「うむ。バカ高いじやろつ。何故だか知つておるか?」

「……量が多く取れねえからだろ」

「半分正解じや」

ワーグナーが、ちちち、と指を振る。

「残り半分は、エルフとの協定があるからじや

「協定?」

「うむ。南西の森に住まつエルフ族は、マナ・ポーションの源泉となる『精霊の泉』を確保しどるが、その対価として、この国から生活用品を支給してもらひ約束を交わしておる。時が経ち、今ではエルフ族と取引したマナ・ポーションは、精霊の靈薬くとして、街中に流通されておるわけじや

「……それが、協定つてのと、どう関係していくんだ?」「わからんか? ヒント出しちゃうつか?」

「うつせえ、話しかけんな。マスター、追加で……」

取り出した銀貨が数枚。鋭い瞳がしばし止まった。

「……おイジジイ。その協定つてのは、昔から『物々交換』なんだな?」

「そーいうこったの」

会得がいつたように、ジークハルトは頷いた。

「なるほどな。交換したマナ・ポーションは、エルフの手から離れりやこっちのモンつてわけだ。安価な日常品と交換したアイテムを、俺たち冒険者に高値で売り捌いてるわけだ」

「正解じや。精霊の靈薬くを『ギルドマーケット』で販売する値段を決めるのは、貴族たちじや。よつて、元手がタダ同然の商品を、いくら吹つかけようが構わんつてこつたの」

「ハツ、貴族つてのは碌な連中がいねえな」

「まあのう。時にジークハルトよ。おぬしが拾つたアーティファクト、そいつを売つた先は何処じや?」

「……ギルドマーケットの、鑑定師ゲートアハテンに決まつてんだろ……」

答えた言葉は低く、そして苦痛に満ちていた。

売り買いの値段は相手に一任せざるを得ない。それでも、これだけの金銭を得られたということは、答えば一つだ。

「恐らく、おぬしが売つたのは、よほど質が良かつたんだろうのう」「黙れよジジイ。メシが不味くなる」

殺氣を込めて睨む。ワーグナーは「すまんの」と一言だけ呟いた。そしてビールジョッキを掲げ、ぐびぐび飲んだ。

「ふあっ! ジークハルトよ。おぬしは頭が良い。冒険者なんぞ止めて、どこぞのギルドにでも入つて、王宮での働き口を捜してみたらどうじじや?」

「貴族共に使われるぐらいなら、死んだ方がマシだ」

「傲慢なやつちやの ふつはあつ!」

「……うつ！」

酒臭い息に眉をしかめ、ジークハルトもまた吐き捨てる。

「ジジイ、今日の講義は終わりか？ 金にならねえ、腹はふくれねえ。おまけに気分は悪くなる。最低の内容だつたな」

「む！ 年寄りの話は聞いておいて損はないのぢや！ いついかなる時、役に立つかわからんからの！ ほれほれ、情報量として、その手羽先よこさんかいつ！」

「つざけんな！ こいつは俺のだつ！」

「ならば追加注文ぢや！ 骨付き肉を追加で五本！ 代金はそつちのガキ持ちでくつ！」

「五十歳下のガキにたかんなジジイッ！ テメHこそ自分で稼げ！…」

「うーむ、この前も迷宮に挑戦したんじやがのー。腰が痛うなつたんで、早々に帰つてきたわ」

「いつそ死ね！」

「ジジイには、いささか辛いわ！ ふおーふおふおふおーつ！」

ワーグナーは、冒険者としては最悪の腕前で、性格も相当に残念だつた。

そんなダメ老人が、もがもが肉を食らいつつ、ふと真剣な眼差しになつて言つ。

「ジークハルトよ。おまえには、仲間はあらんのか？」

「いらねえよ。んな面倒くせえモンはな」

もう、宝の分け前で裏切られ、殺されかけるのは御免だつた。それだから、ワーグナーとも酒場だけの付き合いで、共に遺跡に潜つたことは一度としてない。

「ジジイ、この街を表す言葉を知つてるか？」

「ん？」

「生も死も、氣品はあらず、つてな。どう生きよつが俺の勝手だ」

「……ふむ。まあ、それもよいか。若さ故ぢやな」

ワーグナーは、空になつたジョッキを意味もなく揺らす。

そしてまた、好き勝手に語りはじめた。

「ついでに、もう少しエルフのことを教えてやる。森に住むエルフの種族は【魔】に特化した能力を持つ。彼らはひどく閉鎖的な種族じゃが、それには体质的な要因もある」

「連中は、俺たちより【魔】の消耗が激しつつ聞いたことがあるぜ」

「やうじや。生活の水として、口常に精霊の泉を用いておる故にのう。その【水】が無ければ、彼らとて生きてゆくのが困難なのが」

「や」

ふらふらと、空になつた酒瓶を煽り、語つていく。

「故に精霊の泉の存在は、秘中の秘。エルフ達の間でも、王族につけらなる者にしか詳細が伝えられとらん」

「やけに詳しいじやねえか」

「伊達に、長くは生きとらんでな」

「そりかよ」

田つきの悪い少年は、適当に聞き流し、残つた最後の肉を手にとつた。

「スキありッ！」

ワーグナーが、ジークハルトの酒瓶をひよいつと取り上げる。一気に飲み干した。

「んなつ！ おいジジイ！..」

「ふへーいつ！ ちなみに【魔】といつのは、言葉を用いることで【己の精神を構築している精霊】と接続するのじや！ 命令【魔】ドは仮物質サブオブジェクトとなり、【自然界を構築している精霊】の資源リソースと結びつくことで実体化するつ！ それが【魔】じやあーい！」

「やかましい！ クソジジイ！ いい加減にしねえと殴るぞー！」

「そして最後はあ！ セツくす！ について！」

「ぶはつ！？」

酔いが回ってきたらしい。

驚いたジークハルトが、半端に碎けた肉を口から吐き出します。ワ

一グナーが「ひょつひょつ」と言いながら、怪しく指先を動かした。息荒く、陶酔したように語りだす。

「基本的にい、体内の魔力は、【自然界の精靈】と同調することで、時間をかけて回復させるわけじゃがあッ。対象が強い激情を放つた瞬間ツ！ すなわちオスの精子を、体内の深いところで受けとめることで、【魔】を回復させることも可能なのじやああああいッ！ メスが総じてオスよりも魔力が高いのは、そおいうことおおおおーーッ！」

「黙れエロジジイッ！」

「魔女つ娘が、【魔】を使いまくった後はチャンスぢやぞ。本能的に、やらしー気分になつておるこどが、ワシの長年の研究で分かつておるツツーー！」

「んなもん研究してんじやねえーッ！」

「こす。つと殴つたら倒れた。

息をしていたのが、残念だつた。

\* \* \*

「……あー、クソ、ムナクソ悪い」

過去の回想から戻つてきたジークハルトは、眉間に指を添えた。深く椅子に身体を預け、小瓶を掴み左右に揺らす。

「つまり、エルフの王女は、あの時『喉が乾いてたわけ』だな……」

「昨晩、エルフの王女が急変した様子を思い出す。

【魔】を吸われる【水】を飲まされて、心ここにあらず、という状態だつた。

「……エルフの連中がやられたのは、『精靈の泉』の水源を突き止められて、本質を【魔】で変化させられたせいか。この小瓶に入つてるのが、恐らくその【水】だろうな」

「見しては、無色透明な、ただの水。

本質は【魔】をたつぶり秘めた、エルフ達の日常生活における必

需品だ。

それが性質を【逆転】させられてしまった。飲めば逆に【魔】を失ってしまう【水】へ。

「エルフの純粹な肉体能力は、人間以下つて話だしな。【魔】が使えないエルフなんざ、赤子を捻るようなもんか」

机の上に置いたマグを傾ける。少し冷めた「コーヒー」の苦さが眉間に貫いた。

「もう少し推測するなら、一気に変化するよりは、地味に混ぜてつたんだろうな。そうなると犯人は、多少なりともエルフの連中と接点がある奴らか……」

エリオットが言っていたことを思いだす。

犯人は、王城に関係のある貴族かもしけない、と。

「……無理に考えることなんざねえか。エルフが【水】を取引してるのは王城の連中だしな。私欲に溺れた奴が【水】を独占しようともおおかしくねえ。ただ、水源の本質を変化させても、それを元に戻す必要があるよな……」

元に戻す必要があるよな……

頭を振り。思考を止める。

「俺の知ったこっちゃねえな。報酬も受け取ったし、これ以上は、余計なことに首を突っ込む義理もねえ」

マグを逆さにして、一気に黒い液体を飲み干した。

「つし、通常営業に戻るとするか」

言つて、片眼鏡を掴んで思いだす。

「……そうか。壊れてたんだつたな」

大切な商売道具は、【水】に力を奪われたままだった。

「エリオットの野郎、あとで……」

カラーン、コロン、カララン。

呪詛の念を込めたとき、ちょつと店の扉が開いた。反射的に「よーし、いいところに来たな金よこせ!」と顔をあげれば、そこには

穏やかな顔をした褐色肌の美女が立っていた。

「ここにちは、ジークさん」

「……フィノ」

昨晚『動くと潰します』宣言をした女性だった。今は色氣のない革鎧ではなく、膝下まである白のロングワンピースを着て、右腕には編み模様のバスケットを抱えていた。本人の美貌とも相まってとても華やかである。空いた手の方で深い紫の髪を撫であげて、にっこり、花が咲いたように微笑んだ。

「お仕事中でした?」

「いや……」

怒りの行き場を失つて、曖昧に手をあげるジークハルト。その様子が「元気が無さそう」という風に映つたらしい。心配そうに見つめられる。

「大丈夫ですか?」

「気にすんな。あー、ちょうど鑑定の田星がついたところだ」

「そうでしたか。ですが、仕事が早いですね」

「まーな……」

追加料金よこせ、とは言えなかつた。

「あつ、ジークさん」

「なんだ?」

フィノが、手に持つていたバスケットを机の上に置いた。かぶせていた布を取り払うと、ふんわり、甘い匂いが漂つた。

「パイを作つてきたんです。よかつたら食べてください」

「助かる。今日はまだ、マズいコーヒーしか飲んでなくてな」

「もしかして、起きたばかりですか?」

「ああ」

ジークハルトが頷くと、フィノは「良い事を思いついた」とばかりに両手を合わせる。

「よければ、私がご飯作りましょうか。ここに来る途中で市場の方から、タマゴとか、お野菜を分けて頂いたんです」

「いいのか？」

「はい。エリオット様は、朝から登城されていまして、夜まで帰つてこないそうですか？」

「偉くなつたもんだな。最初はしがない冒険者に過ぎなかつたヤツが」

「本人は、今もそのつもりですよ。三年前と変わらずに」

「……そうか、結構経つんだな」

エリオットがこの街に訪れたのは、三年前。

ジークハルトが冒険者から足を洗い、鑑定業を営みはじめた年でもあつた。エリオット自身の見栄えがよく、剣の腕が異常に立つこともあつたが、連れ立つていた『姉妹』も美女ばかりというのもあって、その名は瞬く間に広まつていた。

「敵多いだろ、あいつ」

「そうですねえ」

「わざわざ『上』を田指すこともねえのにな。一人で、気楽にやつてりやいいのによ」

そう言つと、フィノは口元に手を添えて、くすりと笑つた。

「エリオット様、おつしゃつてますよ。ジークさんが、もつと素直に依頼を引き受けってくれたら、自分の仕事が楽になるのにつて」

「勝手なこと言ひやがる」

「信頼してゐるんですよ。王城の鑑定師ゲートアハテンにだつて、ここまで腕の良い鑑定人はいなつて言つてますもん」

「大げさだな。俺は器用貧乏な、場末の自由鑑定士エル サーズが似合いだよ」

言いながら、ジークハルトはパイを一切れつまんで、口に放り込む。

「おつ？」

瞬間、茶色の瞳が驚きに染まる。真顔で、短く言いきつた。

「美味い。一級品だな」

「でしょ？」

やわらかな店内の雰囲気とは裏腹に。

窓の外は、少しづつ雲が近づいていくようだった。

## 項目8・藪蛇がでてきた場合は、斬り殺す。

現王が座す魔都の城は、平地から伸びた小高い丘の上に建つていた。見張り塔から見下ろせば、魔都ルーラインの全景と緩やかにカーブを描く河の流れが見える。その岸边の一角は、大地がぽつかり抉られており、その場所だけが異質だった。

広がる迷宮の入り口。さらに河の向こうには、緑豊かな森の情景が広がっている。

エルフ達が住んでいた『帰れずの森』だ。

「……じきに陽がくれるな、夜までに一雨くるか？」

蒼髪の男が、濁つた具合の空を見あげていた。そろそろ夕方に近い時間で、空には灰色の雨雲が広がりつつある。

「こんなところにいたのね

「うん？」

声に振りかえる。黒髪をなびかせ、片方の眼を眼帯で覆つた女性が、塔の螺旋階段から顔を覗かせていた。

「バカと煙は高いところが好きね。会議が再開されるわよ。部屋に戻つて」

「わかった。にしても、時間は有用に使いたいものだな

「言えば、女性は素直に応じた。

「無理でしようね」

「意義なし」

城の議会室。広い石組みの部屋には、飾り気のない円卓が一つと、十席に満たない椅子が置かれているだけだ。

「それでは、昨日に回収した宝は引き続き、王城の『ギルドマーケット』の倉庫で保管しておくということです、よろしくですな

「殺風景な室内に反して、高価な服を着た初老の男たちが、忙しく

言葉を交わしていく。

「では、森への調査については、いかが致しましょう」

「最優先の事案でしょう。あの里には、貴重な 精霊の靈薬

となる源泉がありますし」

「うむ。アレは魔都の柱となる、貴重な財源ですからな」

「アルケミ錬魔師ギルドが作っている、代替品ではダメなのですか？」

「効力が無いことはありませんが、まだまだ、改善の余地があります」

「では、やはりエルフの森の調査を行い、原水の状況を確認しないことにはなりますまい」

話の流れは、一つの方向に傾いていくように思えたが、

「……いやしかし、そのための予算はどうするおつもりで」

「街の地方警備に回しているぶんを、一割ほど回してみては？」

「バカな。自警部隊の予算は今でも足りないぐらいでしょう。それよりも、迷宮の関所に投入されている予算をですね……」

簡単には決まらなかつた。

いやとここの場合の、責任時の押しつけ合い。そして予算の出資所の取り決め。結論だけが引き延ばされるやりとりの行きつく先は、

「さて、どうしたものでしようなあ」

明らかに、場にいた一人に向けられる。

言葉を受けた蒼髪の男は、「まったく困りましたね」と、無難な返事をしておいた。

^精霊の靈薬^ といふ名をつけられた【水】は、非常に高価だつた。

失った精神の安定を取り戻し、ふたたび【魔】を発動させることが可能になるアイテムは、一見しては無臭透明の水なので、一セモノが堂々と出回る品でもある。最悪の場合、毒薬をそつだと偽って、暗殺に使われた前例もあった。

それ故に、基本的には王城と直接に繋がりのある『ギルドマーケット』で、やりとりするのが常となる。これは、売り手にとって都

合がいい。

(……【水】の供給が途絶えれば、城側の権威は大きく落ちる)  
エリオットは言葉を隠し、思考していた。

(だからこそ、今は逆に好機といえる。俺たちにとつても、城の連中にとつてもな)

【魔】は、強力だ。　>精霊の靈薬く　がいぐら高価であつても、求める者は多い。

「己を際限なく強化することもできるし、逆に相手を衰えさせることもできる。

自然界の火や氷を模した、擬似的な【火】や【氷】を新たに創造することも可能で、応用すれば自らの武器に、【火】や【氷】の【属性】を付与できる。反面、その【属性】の攻撃から身を守ることもでき、【魔石】と呼ばれる特殊な鉱物を用いれば、その力はさらには増す。

だが、用いれば用いるほどに、精神が疲弊する。

肉体的な損傷はないのに、己の存在意義が分からなくなったり、記憶が抜け落ちたり、ひどいと自我が崩壊してしまつ。

【魔】は使いこなせれば強力無比。しかし同時に、諸刃の剣だった。

「　ツト殿！　エリオット殿ツ！」

「　……は？」

気がつけば、ぼんやりと考えに耽っていた。やや焦つて怒声のする方をみれば、頬に傷のある男が、真っ向から睨みつけていた。  
「心、ここにあらず、といったようだなア？」

齢三十をいくつか超えたぐらいの男だった。筋骨隆々としており、白い魚眼を思わせる瞳が来る。勳章をつけた白銀の全身鎧もまた、ギラリと輝いた。室内の視線がすべて、エリオットの顔に注田する。  
「……大変に失礼をいたしました」

席を立ち、頭を下げる。周りから失笑したような声がきた。  
「どうやらお疲れのようですね。まだお若いというのに」

「申し訳ありません。なにぶん、いつこう所には縁のない下賤な身の上でして」

「ほお、その割には、ずいぶん慣れた風に口が回るなア」

「まったくだ」

初老の男たちも頷いて、楽しげに、柔和な表情で追いつめてくる。「エリオット殿の尊は聞いておりますぞ。三年前、この魔都に現れてからといつもの、破竹の勢いで迷宮を攻略し、今では最も『深淵』に近い男であるとか」

しかしその生い立ちは、ほとんど謎に包まれているとか。

帝都の王族が、妾に産ませた子であるといつ尊もあるとか。エリオットばかり、次から次へ生じる質問に、エリオットは苦笑した。

「単に放浪癖があつて、少しばかり、広く浅く、物を知つてているだけですよ」

「そりだらうな。所詮はこの国になんら想い入れなど無い、余所者だ」

吐き捨てるよに騎士団長が告げれば、取り成す声があがる。

「まあまあ、レンテル殿。その辺りにしておきましょ。普段、人知を超えた迷宮に対峙している剣聖も、いつこう席では心が折れるご様子だ」

「ほお。では我々の闇の『ふきは迷宮以上』と?」

「さもあらん、ですな」

冷ややかな笑いがこぼれる会議室のなか、エリオットはもう一度頭を下げる、席に座りなおした。それから、何度も頭の中で組み立てていた言葉を口に出す。

「皆さま。もし騎士団を動かすのにお困りでしたら、私が束ねたギルドを持つて、南西の森の探索、およびその調査を赴かせていただくことは可能でしょうか?」

「ふざけるなよ、蒼毛の」

レンテルと呼ばれた騎士団長が、睨みを効かせてくる。

「南西の森に住まつエルフの領域は、我らが王に連なる者と、その従者のみが立ち入ることを許された地だ。貴様のよつな、何処の生まれかも知れん者が踏み入れると思うな」

「……失礼いたしました、騎士団隊長、レンナル殿」

「呼吸おいて、言葉を続ける。

「では、我がギルドの者たちは、王宮騎士の手足となつて動かせて頂きます」

「なにが狙いだ」

「単に血が騒ぐだけですよ。未知に対する憧れ、とでもいいましょうか」

「はっ、やはり貴様らは、蛮族に過ぎんな」

「返す言葉もありません。ああ、ところで。昨日、私たちが捕らえました女の詳細は、なにか分かりましたでしょうか？」

安い挑発を流して叫べると、正面にあるいかつい顔が、さらに陥しきくなつた。

「なにか、とはどうこう」とか

「……どうかされましたか？」

エリオットが聞き返す。さらに言葉を重ねる。

「探索先は『帰れずの森』とも呼ばれる迷宮です。如何にしてそれを突破し、エルフの里を落としたのかは見当もつきませんが、捕らえた女を吐かせて案内させれば、エルフの里や源泉にも、楽に辿りつけるのではないかと思いまして、ね」

もつともらしい事を言えば「確かに」などと続く声もあがる。レンデルだけが、苦虫を噛み潰すような顔をした。

「森を案内させるのは、生き残りである、リーアヒルデ王女でもよからうッシ……」

「ならん」

そしてこの時、エリオットの対面、上座にいる壮年の男が声をあげた。

「かの王女が得た傷は深い。我々が近づけば、部屋の隅に逃げだす

程にな

「……しかし、それは……」

「レンデル。女の正体は分かったのか」

落ち着いてはいるものの、しかしこの場で、最も威厳に満ちた声だった。

場がにわかに、しん、と静まりかえる。

「はつ……、いえ、なにぶん、口が堅く……」

「そうか」

するどい灰褐色の眼光が、胸中を貫き刺すように、光る。

「では、ひとまずここまでだな。エルフ族の秘法は取り決め通り、ギルドマーケットの倉庫に保管しておけ。競りに参加していた者たちの処分も、裁判官たちに通達しておくよう」

告げる男の声に、わずかな老いは感じられる。しかし、ひたすらに重かつた。

「さて、エリオット・一一ベルンよ」

「はい」

「お前のギルドに森を探索する許可を出す。我らが騎士の配下となるのは抵抗があるやもしれんが、引き受けてくれるな?」

「微力ながら全力を尽くしましょう」

双眸が混じり、互いにひとつずつ、相槌を打つ。

「ああ、それともう一つ、貴殿に頼みたいことがある

「なんなりと」

魔都の王は、うむ、と頷いた。白くなつた髭を撫で、口を開く。  
「エルフの王女、リーアヒルデのことだがな。先ほども言つたが、不慣れな環境ゆえにか、食事も満足に取らぬし、城中の者とも言葉を交わさぬ。唯一に、おぬしの配下であった者とは、いくらか言葉を通じていたようだが

「フィノですね」

「つむ。その者に、リーアヒルデの身柄を頼むわけにはいくまいか」

「国王ッ！ それは我らに信頼がおけぬとッ…？」

レンデルが激をあげる。しかし変わらぬ口調で、魔都の王は言いかえす。

「事情が事情なのだ。仮に捕られた女がなにも吐かねば、エルフの王女であるリーアヒルデが唯一の生き証人なのだ、わかるな？」

「……ぬ、う」

「いや、確かに王の言質には一理あります」

「そうですな。まずは精霊の泉の原水を、一刻も早くとり戻さねばなりません」

場に集つた方々から、賛同する声があがる。さりげなく、王女の安否よりも、泉の水が大事だと言わんばかりだった。

エリオットが密かに笑う。冷静さを装つていた表情が、ここに来て初めて崩れていった。

項目9・王女とメイドとの暮らし方。 該当項目が不足しています。

その夜、ルーアンの街は、バケツの水をひっくり返したような大雨に見舞われた。

表玄関の看板は、当然のように「閉店中」だと告げていたが、そんな時でも平然と扉を開けて入ってくる客がいる。

「よお！ ジーク！」

鈴の音は強い雨音にかき消され、聞こえなかつた。客は雨に負けじと叫ぶ。

「昨日ぶりだな！」

「表の看板が見えなかつたのか！」

「雨が強くてな！」

ずぶ濡れになつたエリオットの側には、連れが一人いた。共に暗色のローブを被り顔を隠していた。

「夜分遅くにすみません、ジークさん」

連れの一人がフードを取り払う。昼に訪れていたフイノだつた。両手に抱えた大きな荷物を、重たい音を立てて置く。

「あ、う……」

さりに、フイノの足下にひつつく最後の一人。この場では頭ひとつぶん小さい。フードの下から覗くまぶしい金髪と、明るい翠色の瞳が、ジークハルトを恐ろしげに見上げていた。

「……おい。エリオット、こいつは」

「ああ、リー・アヒル<sup>デ</sup>王女だ。御身を一時、俺達が預からせてもらうことにした」

「どういうつもりだ。ここへ連れてくる必要はねえだろ？ が」

「実は、少し気にかかることがあつてな。俺たちのギルドも安全とは言い切れん」

「……だから？ なんだつてんだよ」

「明日には、俺も森の搜索で留守にせねばならん」

「知るかつ！」

「俺がない間、王女の護衛を頼んだぞ」

「おいつ！ ふざけんな！！」

殺意すら込めてエリオットを睨むも、

「ジークさん、私からもお願ひします。さあ、リーアヒルテ様も」

「お、おねがい、しま、う……」

残る一人が揃つて、ていねいに頭を下げる。一步離れたところから「断れんだろう？」と、エリオットが得意気な顔を浮かべていた。

一夜が空けた。

朝が来ると同時に雨は去つたのか、空は綺麗に晴っていた。

「……ねつみい」

茶の短髪をかきながら、マズいコーヒーを片手に、店の表に通じる部屋までやつて来る。玄関に手をかけたところで、すでに鍵が開いていることに気がついた。

「ふん、ふん、ふふん」

鼻歌交じりに、店の前を箒で掃いでいるメイドがいた。城中や貴族の屋敷では珍しくも無いが、下街とも呼べる職人たちの住むところには、使いにでも出されない限り見ない姿だ。

「あっ！ おはようございます。ジークさ ご主人様」

あらうこととか、場末の鑑定士の男を、様づけ呼ばわりだった。まだ陽が上がりきらぬ早朝から妙な幻覚でも見てるのか。そんな顔をしつつ、ジークハルトは店の中へ取つてかえす。すると今度は、

「…………あ」

廊下に続く扉の向こう。いつそり顔だけ出している、金髪翠瞳の子供と目が合つた。

「ひう！」

ジークハルトの記憶では、背中までなびいていた金髪は、今は自分が同じほどに短く、耳元で切り揃えられている。着ている服はあ

りきたりなシャツの上に、大工たちや、その使い走りの少年たちが着る作業用のツナギだ。頭は長い耳を隠すつもりか、たれくついた帽子を被っていた。

「フイー……。」？

一  
あのな

ジーケハルトが根負けしたように前に出る。途端に「ひつー」と両肩を振るわせて、部屋の隅に走つていった。おどおどしながら左右を見回して、

「うめん、なひせい」

まるで母親から離された、力のないウサギたつた。シーケバルト  
がますます不機嫌そうに眉をしかめると、目の前の小動物はガクガ  
ク震えて、さつと作業机の影に隠れた。

「どうしろってんだよ」

思わずといった感じで呟いた時。

玄関の扉が、明るい鈴の音を立てて再度開いた。

「どうしたんですか、ご主人様？」

フイヽヽヽヽヽ

一  
あら

エルフの少女が、全力で、弾丸のようにまっすぐ駆けた。ジーク  
ハルトの隣を抜けて、途中でこけそうになりながらフイノに抱きつ  
く。受け止めたメイドは、簾を壁際ににおいて小さな頭を愛しそうに  
撫でてやる。

「リアン様、もうお日覚めでしたか？」

「リアン？  
ああ

偽名かと納得する。それから仲睦まじく、抱き合つ二人を見比べた。しかし少年に扮したリーアヒルデはともかく、フイノが、メイドの格好をしてる理由はよくわからない。

「フィー、ビックが行っちゃったと思ったつーーー

「大丈夫ですよ。私はどこにも行きませんからね」

「えへ」

幸せそうに、白いエプロンの胸元に顔を寄せる。そして、メイドに転職した知り合いは、紫色の瞳を細めて微笑んだ。

「ご主人様。リアン様が目を覚まされたようですし、食事の支度にいたしますね」

「……いいんじゃないか」

「かしこまりました。ご主人様」

恭しく礼をしてくるメイドに対し、ジークハルトは、すこく気まずそうな顔を浮かべる。何気なく手にしたコーヒーを煽れば、いつもより、苦い味わいが広がった。

## 項目10：確信犯である顧客、および知的幼女との会話。

奇妙な居候が一人増えたが、やるべき仕事に変わりはない。

朝食を食べ終え、作業机に座つて時間を潰していると、鈴の音が聞こえてきた。

「よお、兄さんよ！ 昨日はすげー雨だつたなあ！」

一日前に黒のナイフを買い取つた、あの露店商が入つてきた。さらにもう一人、のつそりと、背中に大斧を構えた男がやつてくる。太い両腕をむき出しにしており、威圧的な雰囲気を隠そつとしない。

「場末の鑑定士たあ聞いてたが、確かに若えな」

「アンタは？」

「この小せえ奴と、何度か組んで迷宮に潜つてる。そんだけだ」両腕を組んで仁王立ちになる。ジークハルトは椅子に座つたまま、明らかに友好的でない視線を受け止めた。

「話だと、随分腕が良さそうだつて聞いてたんだがな。 実際どうなんだ？」

「受け取つた料金以上の仕事はやつたぜ」

「ほお」

どすん、と床が響く音を立てて、大男が椅子に座る。

「あのナイフも、銀貨一枚で買い取つてくれたそうじやねえか」

「今更返せつてか？」

「んなこたねえよ。 ただ、相方が他に持ち込んだ鑑定品は、どうなつたのかと思つてな。 中には良質の【属性】が付された、レアな>妖精指輪< もあつたろ？」

「クズ銀の指輪に、カスい【属性】が入つた指輪なら鑑定したぜ」

「……んだと？ おい鑑定士、もつべん言つてみる」

「三流品だつてんだよ、全部な」

ジークハルトは席を立ち、一日前に鑑定した商品を机の上に並べ

た。

「指輪が三點、鎖帷子、杖、ネックレスがそれぞれ一点ずつ。合わせて六点だ。不要な【属性】も解いてやつたから、銀貨六枚でまとめて引き取つていけ」

「ざけんなッ！」

「ドンツ！ と勢いよく机が叩かれた。

「所詮は場末の自由鑑定士だな。安い料金に見合つた、適當な仕事しかしねえつてか」

「そう思うなら勝手にしな」

大男の方が、眉間に太い血管を寄せ、ジークハルトを睨む。その後ろでは、小さい方の相方が「すまんね、兄さん」という感じに苦笑しているが、その腹の内も知れない。ともすれば難癖を重ね、あのナイフを取り戻そうという思惑ぐらい、あるかもしれなかつた。

「おい、真面目に鑑定したんだろうなッ！」

「手は抜いてねえよ。そっちこそ、次はホラ吹いて持ち込むんじゃねえぜ」

「なら、その理由を言つてみろつてんだよ！…」

再び机が叩かれる。ジークハルトが面倒くさそうに、息をこぼした。

「さつきからうるせえな。テメエら、この町に来たばかりの新米だろ。浅層ていどのアイテムなら、こっちだつて飽きるほど鑑定してんだよ。大方は迷宮の小鬼ゴブリンと、【炎】を操る術者が一人つてとこだろ？」

大男が目を見開いた。

「どうして分かる」

「役に立つかは知らないが、覚えときな。小鬼の連中は、気に入つたモンは赤ん坊みたいに口で転がして、自分の印だつていう傷をつけたがる。片眼鏡モノクルで見りや、唾液でマーキングされた後は一発で見抜けるが、肉眼でも結構わかるもんだぜ？」

言つて、指輪に共通して残る、独特のひつかき傷を示してみせた。

「ほ、ほお……」

大男が、先ほどの激昂した態度から一変、知性を窺わせる色合いに変わる。隣の男も思うところあつたのか、両肩を竦めていた。

「昔は冒険者だつつてたな、兄さん」

「ああ。引退する前は、単独で中層以降に潜つてた」

「へえ、たいしたもんだ」

「そいつはどうも。言つとくが、こつちはまともに商売してんだぜ。それに、最初から難癖つける目的の客は、テメエらが始めてじゃないんでな」

「む……」

大男が野太い指を、自らの顎に添える。

「説明も今なら無料タダにしといてやるが、どうする?」

「ははつ、兄さんにや適わねーな、頼んますぜ。なあ、ダンナ?」

「……仕方ねえ、聞かせてみろ」

ジークハルトが、初めて口の端を緩めた。語りはじめる。

「まずはこの指輪だな。低級の小鬼ぐらいなら従えさせられる【使役】の属性が付与させられる。害を与えるのが目的の『呪い物』は、基本的には人が作る物だ。となれば、連中を操る主がいる」  
続けてネックレスと、赤い宝石を乗せた杖を取り、いつのまにか聞き入つていた二人に向ける。

「……で、これがその主だろ? 【魔】に精神を乗っ取られた奴は、正常な判断ができなくなる。もしくはテメエらみたいな新米冒険者を狙つて味を占めた、魔術師くずれの盗賊だ」

「【炎】を使ってきたのが分かつた理由はなんだ?」

「色だ。【魔石】は基本、術者のイメージがきつかけで、この世界に実体化する」

言つて、杖に嵌つた赤い石を指で叩いた。

「【魔】の威力をてつとり早く高めよつと思えば、【魔石】の色を近づけることが、もっとも手つ取り早い。闇に住む小鬼共は【炎】が苦手だしな。じつちの鎖帷子は、連中を閉じ込めておく拘束具、

と言つたところか」

「……フン。なかなかやるじゃねえか」

「そう思つなら、ついでに一つ忠告しといてやる」

「ん？」

すう……と、ジーケハルトの瞳に険が増す。

「お前ら、死体漁りは適当にしどけ。場末の店で処分しようと思つ  
ぐらいの度胸なら、近い将来、いつか必ず同じ日に合つざ  
客である男一人が、揃つて気まずそうに顔を見合せた。  
存外、気の良い二人組みらしい。」

「そいつは、相手から襲つてきたから奪つてやつた、ただ……」

「兄さん、俺らが死体を漁つたのは、アンタに売つたあのナイフの  
持ち主だけだ。なかなか、宿代にも切羽詰まる有様でしてね」

「別にかまわねえよ。どつちでもな」

ジーケハルトは、少し面倒くさそうに告げる。それから、鑑定し  
たアイテムをすべて一人の前に運んだ。

「ここから東に歩いた通りに、溶鉱炉を持つたクズ鉄屋がある。た  
いした値にはなんねーが、俺の名前出して持つてけ。一日のメシ代  
ぐらいにはなるからよ」

結局、ジーケハルトは料金を受け取らなかつた。なんとなく講釈  
つぽいものを垂れて満足してしまつたという感じに、ぼんやりと天  
井を仰ぎ見た。

「生きてりや、また来るか」

良くも悪くも、善良な人間はジーケハルトにとつてはありがたい。  
客の信頼を得ることができれば、巣戻にして常連になつてくれるこ  
とも多いのだ。

『<sup>エル</sup>自由鑑定士』は言うなれば、個人営業の鑑定人だ。専門の試験  
を突破して、王城と直属繫がりのある、正等な『<sup>ゲートアハテン</sup>鑑定師』ではない。  
誰もが名乗れる自由鑑定士は一言で「信用に足りない」わけだが、  
鑑定師は、その信用に足るぶん、制約も大きかつた。

王城直下のギルド機関にしか所属できず、月々で、一定の給金が保証される代わり、個人で店を出したり、鑑定料を決めることができない。だから、鑑定料金が安いだけの自由鑑定士は絶えない。むしろ堂々と、詐欺目的で冒険者に近づく者が多かつた。

故に、名が知れた実力者たちは、ギルドの鑑定師にだけ依頼を頼む構図ができる。中にはジークハルトの腕を見込んで、お前も鑑定師にならないかと誘つてくる者もいた。

「……お断わりだ」

昔を思い出すように、一人呟いた。

それから、小さな店で、黙つて、慎重に、別の遺物アイテムを鑑定していく。開いた店の窓からは、気持ちのいい風が吹き込んでいた。ふと顔をあげる。

「店主と客。俺たちの間柄なんてのは、それが一番だ」  
客一人につき対価を得て、日々の腹を満たして生きる。  
未来への展望はなく、今だけを見つめる。  
求めるものは無く、けれど失わない。  
一人で生きるのは楽だった。

「ご主人様」

「…………ん？」

「お疲れさまです。一息いれませんか？」

すっかりメイド服に馴染んだフイノが、優しい顔で笑いかけていた。  
「居間の方に、コーヒーと焼き菓子をご用意しました。あまり根を詰めすぎると、倒れてしましますよ」

「そうだな。リアンは？」

「リアン様でしたら、お部屋でずっと本を読まれてます  
「本？」

フイノと、リーアルヒルデ」と「リアン」は、半ば物置と化してい  
た屋根裏部屋に身を置いていた。

「リアン様、びっくりするぐらい賢いんですよ。いつも……、自分の

周りを取り囲むように本を広げて、何冊も同時に手を通されるんです」

「本当か？ あそこにあるのは？」

ジークハルトは、壁にかかった老人の肖像画を見やつた。当たり前だが、相変わらず赤ら顔で、ビールジョッキを片手に笑っているおかしな一枚だ。

「あそこにあるのは、クソジジイが遺していった難解な本ばかりだぜ」

廊下の先、部屋の奥にある小さな食卓で、三人が席についていた。ジークハルトはここ最近になって『マズくないコーヒー』の存在があることを知った。香りの良い、熱を湛えた液体に口づけ、中央にある木製の器にも手を伸ばす。

「ん、美味しい」

「ありがとうございます」

「コーヒーを一口。軽い苦味がクッキーの仄かな甘さに、よく合つた。

「フィノ、美味しいコーヒーを煎れるコツみたいなのはあるか」「愛情です」

「そうか」

さつぱり分からなかつた。ジークハルトは、やや手持ち無沙汰に

「壊れた片眼鏡」を手で転がしていた。

「ご主人様、それは？」

「俺の商売道具だ。この前の……今は調子が悪いみたいでな」

この前の仕事のせいでと言いかけて、正面を見る。頭には長耳を隠すゝたれゝのついたキャップを被り、職人用の青い作業着と、同色の長ズボンを履いて、下町の少年に扮したエルフの王女がいる。

「あぐはぐまぐぐつ！」

「あぐはぐまぐぐつ！」

小さな手を往復してクツキーを掴み、頬を膨らませるほどに食ら

う。それと同時に、ぶ厚い本のページを捲つていぐ。

「口と手が器用に動くな」

「そうですねえ、こぼれでますけれど」

フィノが作ったクッキーを齧り、視線はひたすら本の上に釘付けに。口元からは、ぼろぼろと絶えずこぼれ落ちる。

「あつ

<sup>ツナ</sup><sub>キ</sub>

青い作業着の上に散つたものを、ひょいと指で摘んで、普通に口

元へ運んだ。

「おい、コイツは本当に王女なのか？」

「そうですよ。可愛いじゃありませんか」

「関係ねえだろ、それ」

「もぐぐ」

「rian。食うか、読むか、どっちかにしろ」

「…つ……はぐはぐ、はぐべ……つ！」

ぼろぼろ、ぼろぼろ。ぱらぱら、ぱらぱら。

「聞いてねえな」

「無駄ですよ。燃料が切れるまでは」

「燃料？」

ジーハルトが訝しそうに眉をひそめる。と、皿の上に乗つたクッキーが、一つ残らず消えていた。てのひらが、カラカラ、カララつと、空しい音を響かせる。

「……あ、う？」

rianが指先についた粉を舐めながら、そつと、隣に座るメイドを見た。

「ねー、フリー、お・か・わ・り」

「ダメです」

「おねがいー」

「許しません」

「……うう……」

はらり、と哀しそうに本のページが捲られる。それから今度は、

ジークハルトの手元に視線が移った。手にした片眼鏡に興味があるのか、じーっと手元を覗き込む。

「コレが気になるのか？」

「「」、「ごめんなひやーい！」

「怒つてねえよ、ほら」

言いながら、ジークハルトが手にした片眼鏡を投げた。リアンが慌てて両手を出して受けとめる。と、フィノもまた、隣から覗き込む。

「これ、アーティファクトですね」

「ああ。俺が昔に、知り合いでから譲つてもらつたモンだ。レンズ自身が【魔石】で作られていてな。コレを通してアイテムを見れば、俺みたいに魔力の薄い奴でも、対象の【本質】が具現化されて見えるようになる」

説明を聞いていたフィノが、アイテムを見て言った。

「でもこれ、【魔】が感じられませんね。なにか外的な要因を受けたりしました？」

「最近、ちょっとな。やっぱ修理しねえとダメか」

「ええ。レンズ部分の【魔石】は、一度分解して再度【魔】を籠めるか、代用品を用意するしかないと思います」

「付与師エンドチャンタが必要か、ヤツらぼつたくりやがるからな……」

それもまた、王城のギルドに勤める鑑定師ゲートアハテンと同様の職業だった。絶対数が少ないため、修理は遙かに高額となるのだが、

「わたし、できう、かも……」

ジークハルトが愚痴に近いため息をこぼした時、リアンが言った。恐々と、それでもどこか力強く、ジークハルトの方を見あげていた。「この中に入つてるませきに、【魔】をわけてあげればいいんだよね？」この、えつと……。あ、あーひふあくと？？

しどろもどろ、自信無さげに、泣きそうになりながら、それでも言葉を続けた。

「わたし、できうかも。この絵本に、やり方、書いてあつたから」

リアンが手元に広げた、ぶ厚い本を閉じる。

「だから、それ、直せると思いまう」

「本當か？ おまえ、工具を使ったことはあんのか」

「……あう、それは……、ないれす……」

リアンは怯えたように、本の後ろに隠れた。じわりと涙が浮かぶ。隣に座っていたフイノが、リアンの柔らかい金髪を撫でた。

「ええっとですね、リアン様。【魔石】に特定の力を込めるのは、すごく高度な能力が問われるんですよ。しかも、他者が最初に込めたアイテムに【属性】を上書きするのは、とっても難しいんです。魔都でも付与師エンドチャレンジャーと呼ばれる専用の職人が、少数いるぐらいで……」

「……フリーも、信じてくれない？」

「あ、いえ、そのあ」

「できるもん」

今度は頬をリスのように膨らませて怒る。フイノが困ったように、ジークハルトを見た。

「リアン、おまえ【属性】を上書きすることができんのか？」

「で、できまう！」

「ただし、バラすのと、組み立てるのは出来ないってか？」

「で、できまへん……」

ワーグナーの書物を抱えて悲しそうな顔をする。けれど翠の瞳は、どこか期待と切望にも満ちていた。名前程度しか知らない、エルフの瞳と意思が不思議と胸を打つ。

「意外と面白いかもな」

一級品か、否か。ジークハルトの興味を惹いた。

「リアン、それ持つてついてきな」

「ふえ？」

「タダ飯が食らえるのは今日までだ。この店にいる間は助手として働け。お前もアイテムに興味があるなら、できる限り俺から知識を盗んでみろ。どうだ？」

まずは、最初の手ざわりを確かめるように告げる。

対する翠の瞳は、より一層輝いていた。

「あ、あいつ！」

「よし」

立ちあがる。職人は足早に部屋をでた。その後ろを、王女が迷いながらも追いかける。

「…………あらあら」

一人残された侍女だけが、くすりと笑う。楽しそうに呟いた。

「では。私もお夕飯の支度をしましょうか」

夜が深まっていた。

店を閉店し、食事と風呂も終え、あとは眠りにつくまえに仕事場の道具を整理する。力を取り戻した片眼鏡のレンズ周りを、水で濡らせた布切れで拭いていた。だまつて瞳に乗せると、ガラス越しにぼんやり揺らぐ、世界の色が見える。

「本当に、直しちまいやがったな…………」

くくつと笑う。一度、力を吸い込まれてしまつた片眼鏡のアーティファクトは、以前と変わらないどころかその力を増している。

「たいしたもんだ」

【魔】と呼ばれる力に優れていた所以なのか、リアンは確かに付与エンチャンターとして優れた才能を持つていた。しかし悲しいまでに不器用で、ネジの一本を外すことすら時間をかけた。アイテムの構造を解説するとい瞬で理解するのだが、それ以外の事に頭が回らない。

「一種の天才ではあるんだろうな」

思ったその時に、すぐ後ろで扉が開いた。

「…………あ、あの」

ジークハルトが振りかえる。リアンがいた。

まだ苦手意識が根強く残っているのか、扉にしがみついたままだ。

「どうした？」

「…………」

扉から身を半分だして、ジークハルトを見ている。昼間に着ていた作業着は脱ぎ、今は綿製の、高価なネグリジエをつけていた。

「まだ、おじい」と、してまつ?」

「道具の手入れをしてるだけだ。今日はもう寝る」「てつだう?」

「よせ、仕事が増える」

「……う……」

落ち込んだその顔を見て、疲れたように付け加える。

「悪かった。ところで、なにか欲しい物は無いか」

「くう?」

「おまえが直した片眼鏡は、貴重なアーティファクトだつたからな

「あ、あい」

「おかげで金が浮いたんだ。無理な頼みでなけりや聞いてやるから、言つてみろ」

リアンの表情に、ほんのわずか明るい笑みが浮く。おずおずと部屋に入ってきた。

「……あ、あのね……」

控えめに、壁にかかつた肖像画を指さした。

その先にあるのは、赤ら顔、親指を立てて笑うワーグナーがいた。

「このひとに、あつてみたい」

「……どうしてだ?」

「このひとが、あの本を、書いたんだよね」「わかるのか」

「なんとなく……。このひと、ジークハルトのおじいさん?」「やめろ、悪寒がする」

思わず眉間に鋭くなってしまつ。

リアンが怯えたように身を引くのを見て、ジークハルトは面倒くさそうに付け足した。

「まあ、師匠と呼べないこともねえな

「ししょー?」

「教えを請つた相手だ。役に立つことから、へだらなこ」ここまで、いろいろな

「今もこの街にいるの？」

「いや、もう何年もあつてない」

「どうして？」

「死んだんだる、たぶんな」

言つと、しばらく間が開いた。リアンは少し迷つた素振りをしながらも「どうして？」と繰り返してきた。

「ここは『そういう街』だ」

応えたジークハルトの声には、ほんの少しの苛立ちと、それから苦痛が滲んでいた。

「ジジイは冒険者としてこの街にやつてきた。それなら、いつ死んだつておかしくねえ。迷宮の中で朽ち果てりや、死体だつて見つからないのも珍しくない」

「ねえ、ジークハルトは……」

リアンが呟いた。初めて名前を呼ばれた。

「この街が、嫌い？」

「嫌いだ」

即座に答えた。

富は一部に集中し、貧困者は命をかけても、その日の飯種を稼ぐのがやつと。中にはエリオットのような例外もいたが、他者を憎く思つよりもまず、この国の有りようそのものが腹正しいと思つていた。だからせめて、ジークハルトは王宮に仕えない。稼ぎが少なくとも、小さな店を続けていることが、言葉無き抵抗だつた。

「わたしも、嫌い」

「だろうな」

親族、同類の一族を皆殺しにされた。我欲の詰まつた人間に裏切られた。商品として扱われた。そんな境遇にあつて、

「森は嫌だつた」

「森？」

「うん。私は【幹】だったから。ずっとずっとと、同じじことにいて、同じ本をずっとずっと読んでたの。外に出してもうえなかつた」「どうこうことだ?」

「……ないしょ」

寂しそうに微笑んだ。瞳はいつもすら潤んで、一滴だけ、頬を静かに伝いおちていく。

「でもね、だからね。生き残りだって言われても、よく、わからぬい」

「そうか」

「あのね。ジークハルト」

「ジークでいい」

「じゃ、ジーク。お願ひしてもいいでつか?」

「……なんだ」

少し困惑したよつに返事をすると、コアンはゆっくり、笑みをこぼした。

「わたしの、しょーになつて」

項目11・給と報の比率は3:7。

リアンがジークハルトの店に来て一週間が経つた。特にこれといって波風も立たず、平穀無事な日常生活が続いていた。

匂過ぎ、密足が途絶えていた時間に、ジークハルトは随分と冷めてしまったコーヒーを飲んでいた。

「まだか、リアン」

「うくつ、ん、ん、ん~つ」

机に片肘をつき、酸味の効いたコーヒーを飲んでいる隣で、リアンが必死に手を動かす。

「むずかしーでう、しじょ~つ~」

「それぐら~、わ~せとどバラサ。あと、その呼び名やめり

「えー」

新縁の如き翠瞳で見上げられると、それ以上は反論する言葉も消えてしまつ。なし崩し的に「手を動かせ」とだけ言つと、今度は素直に従つた。

「むむ~つ!」

作業机の上には銀色のトレイが乗つてゐる。精密のネジ回しで、細かいパーツに分解された、目覚まし時計の部品が並んでいた。

「遅い。おまえ、本当に不器用だな」

「うう……」

リアンはネジ回しを手に、ふらふらと、危うげに外していく。工具の先についた小さなネジを、トレイの上に持つていこうとした時だ。

ピニックと机で跳ねて、

「あつ~?」

床の上に落としちまつ。

「お~、無くすなよ」

「あ、あこつ~!」

拾いあげようとして頭を突っ込み、今度は「「」すつー」と派手な音をたてた。ネジを摘んで現れたリアンは涙目だった。

「……おでこ、ぶつけてしまいまひた……」

「なにやってんだ、バカ」

涙目になった、リアンの前髪を持ちあげた。指を近づけ、触れる。「し、しょーつー？」

「痣にもなつてねえ、大げさだな」

「あ、あのつ、ええとつ！」

カララン、コロン、カララン。

リアンが軽く目を回しているときに、店の扉が開いた。

入つて来た客は長身細身の女性だった。獣の毛皮で作られたレザーベストとズボンを身につけ、板金の入つた硬質なブーツが床を叩く。右目は眼帯で覆われており、左手は常に、腰元にある長刀の柄に添えられていた。

「久しぶりね、ジグ」

一つに結いあげた長い黒髪が揺れる。

「……レティーナ？」

ガタツと椅子が音をあげ、ジーグハルトが立ち上がった。そんな様子を楽しむようにして、残された瞳が猫のように細くなる。

「ジグ、最近あなたの顔を見なかつたから、野たれ死んだかと思つてたわよ」

「こつちのセリフだ。残念だが、そこそこ上手くいってるさ」

ジーグハルトが席に座りなおすと、レティーナと呼ばれた女性は近づいた。

「相変わらず、副業の仕事を受けてる。つて聞くけれど」

「金があつて困るこたあないからな」

「あまり安請け合いしてると、死ぬわよ？」

ふつ、と笑いながら、ジーグハルトの向かい側にある椅子を引き、

浅く腰かけた。

「……で、どうした？」

「そのまえに、私も質問したいのだけど」

レティーナが、ややジト目になつて、言つ。

「ジグ、あなた。いつのまに子供を拵えたのよ

「は？」

レティーナの視線を追つたその先、机の下に隠れたリアンが顔だけ覗かせていた。眼帯をつけていない方の瞳に見つめられると、「ひいっ！」と言つて、また引っ込んだ。

「すうじい美形ね。男の子？ 女の子？」

「うるせえ、勝手に俺の子ビもにすんな」

「もう。相変わらずの堅物ねえ。冗談ぐらい流しなさこよにんまり笑つたとき。後ろにある扉が開いた。

「失礼します、飲み物をお持ちしました」

「フィ～～～つ！」

机の下からリアンが飛び出して、白黒エプロンの裾に、ぎゅむつと抱きつぐ。

それをみて、レティーナは怪訝そうに、ジーパーハルトの方を見た。  
「……あ、もしかしてそういうこと？ 連れ子の女性に手を出すなんて、いい度胸してんじやない」

「だから、ちがう。こつらは事情があつて預かつてただけだつー。」

「そうなの、つて……」

フィノの顔に注目する。レティーナは何かに気がついたよう、目を瞬いた。

「貴女、蒼髪のギルドにいたわね」

「いいえ。私はただのメイドですよ。剣闘レティーナ様」

続けて、レティーナの視線がゆっくつと、腰元にひつづく子供の顔に向けられた。

「そつちの子は……」

「俺の弟子だ。裏路地で食いつぱぐれでるといふを、拾つたんだ」

「弟子？ ジグの？」

「ああ、付与師<sup>エントチャンター</sup>の素質を秘めてる。ただ、半端なく手先が不器用なんだ。技を仕込んでる最中だ」

「へえ、ジグが弟子を取るなんてねえ？」

レティーナが、くすと笑う。

今度こそ楽しそうに、女性らしい含みを込めて、少し意地悪く。

「昔の貴方からは想像できないわね」

「うるせえな。冷やかしにきたなら帰れよ」

ジークハルトが、ガシガシと髪をかく。反対の手をだして、つまらなそうに告げる。

「仕事を持ってきたんだろうが。鑑定物があるなら、さっさとよこせ」

「悪いわね、鑑定の依頼じゃないの。でも、ちょうどよかつたわ」「なにがだよ」

「実は、付与師を探してたの。貴方の伝手で、その筋の人間がいるかしらと思ってね」

レティーナが胸元のベストに手を入れ、ポケットから、てのひらに乗るサイズの懐中時計<sup>ポケットウォッチ</sup>を取りだした。ジークハルトの瞳が見てわかるほどに大きくなる。

「……まだ、持つてたのか」

「懐かしいでしょ」

「少しね、借りていいか」

「ええ」

時計を受けとる。懐から片眼鏡を取りだして乗せた時、

「それ、貴方も持つててくれたのね」

「大事な商売道具だからな」

言いながら、時刻を合わせ「リューズ」を動かした。

ぐるりと、一つの針が仲良くまわる。

「どこか悪いのか？ 時刻合わせも問題なくできるみたいだが」

「肝心の【魔】の効果が弱まってるみたいでね。一日で時間もズレ

てくるのよ

「つてことは、中の【魔石】に問題があるな。一度、バラすぞ？」

「構わないわ」

レティーナが頷いたのと同じく、ジークハルトが振り返った。

「rian、仕事だぞ。はやく来い」

「あ、あいつ！」

フィノにくつついでいたrianが、慌てて駆けてくる。作業着のポケットから、小さな片眼鏡を取りだし、同じように身につける。

「ふふ、可愛い弟子ね」

見かけは小さえが、実力はあるぜ。お前からもらった片眼鏡、実はちつとへマして使い物にならなくなつてたが、rianが【魔】を付与して、今は問題なく動作してる

「へえ、やるわね」

黒の瞳が優しく微笑んだ。すっと手を泳がせて、たれのついた帽子の上から、rianの頭をなでる。

「お手並み拝見といくわよ。小さな職人さん」

「あ、あいつ！」

ジークハルトの手に、精密のネジ回しが渡される。

手早く蓋を開いて、刻まれたサインをrianに見せた。

「職人の名前は、アドルフ・ランゲ。有名な時計職人であると同時に、凄腕の付与師ヒンチャシタでもあつた人物だ。この職人が作ったアイテムは冒険者だけでなく、一般人にもコレクターが大勢いる。サインの虜物も多いからな、しつかり覚えとけよ」

「ほ、ほむつ！」

rianが身を前にだして、サインを見た。ひたすら一心に見つめていると、そこまで見んでいいと、デコが叩かれる。ぴい、と鳥の鳴き声みたいな声をあげて引っ込んだ。

「解説するぞ」

「あい」

「」の男が作った時計には【魔石】が込められている。【魔石】は、時計のイメージと呼応して、装備者の速度を高める効果を持つ。影響は微々たるものだが、一瞬の判断が生死を分ける冒険者にとって、その効果は大きい

語つて、ジークハルトは懐中時計をバラしていく。まつたく危うげなく、細かい部品を、トレイのなかに移していった。

「し、ししょー！ すごいでうつ！」

「やかましい。さつさと片眼鏡に【魔】を込めろ。まずは【魔石】の位置を探せ」

「うん」

片目に乗せた片眼鏡で、言われた通り、黙して見る。

「……いちばん、おく。ぐるぐる回つてる、ばぐるまに、がちって、あたつてうトロ！」

「テンプ、だ。正しい名称ぐらいは覚えておけよ」

リアンが答えた後も、よどみない手つきで懐中時計の完全分解を進めていく。動力源となるゼンマイを入れた香箱車をはじめ、時計の針と連動した一番車、二番車、四番車、そして、速度の伝達と調整を行う心臓部へと辿りつく。

「ここだ」

振り子の原理を持つて回転する、テンプと呼ばれる機械の上。隣合わせた歯車の速度をひつかけて調整している『爪先』に、緑色の、極小の【魔石】がはまっていた。

「リアン、この魔石の【属性】が分かるか？」

「んー、【風】かなあ。それに、じかん？」

「正解だ。冒険者からは【時空】じくうと呼ばれてる」

「あら、本当に優秀なのね。さすが、ジグの弟子だわ」「えへへへへ」

リアンが、てれつと笑う。その額を、ジークハルトが指ではじいた。

「ほけつとするな。いいか、よく聞けよ

「はうあつ……」

リアンが、おでこを両手で抑え、頷いた。

「ランゲが作る懐中時計は、精巧ではあるものの、基本的には通常のゼンマイ式と変わらない。だが、これに【魔】を込めると言が別だ。ワーグナーのジジイの本を読んだお前なら理解してると思うがな。【魔】には、わずかながら、質量が存在するんだ」「重さがあるってことだよね？」

「そうだ。ジジイの言い分だと、魔術発動の為の【精霊】には重さがあり、【魔】として概念化されたのも同様だつて話だ。実際の炎や水に重さがあるように、人間が生みだした【炎】や【水】にも重さがある」

「あい」

「そして【魔石】に属性化された概念を封じた場合、【魔】の効果が増幅されると同時に、質量そのものも大きく増す」

「あい」

「ぐん、ぐん、と首を振るリアンを見て、ジークハルトも一息つく。向かいに座るレティーナは、反対に首を傾げはじめていた。「つまりだ。歯車の回転にひつかかり、回転数を維持している【魔石】の爪先に重さが増せば、どうなると思う?」

「テンプ本体の回転に、」じさがでまつ

「誤差が出ると、起きる弊害は?」

「ひっかける爪先のリズムがズレて、はぐるまの回転も、一緒にズレていきまつ」

「そうなると、どうなる?」

「時計の針を乗せた別のはぐるまも、ズレが大きくなりまつ。ズレがひどくなつたら、時計として、ただしく機能しまへん」

「正解だ」

ジークハルトが手を伸ばす。軽く、帽子のつまに手を乗せた。

「えへ~」

ほんわか喜ぶリアンに向かい、しかしもう一言。

「お前なら、マイシをどう直す？」「くう~」

リアンが、きょとんと首を傾げた。

「この時計を、自分が作る立場で考えてみる。【魔石】の効果はひとまず考えなくていい。これを時計として正しく使えるようにするには、どうする？」「ませき、をつかわず、フジーの部品をつかこまつ」「不合格だ。もひとつよく考えてみる」「いい」

リアンが、そつと静かに目を伏せる。

その様子を見て、ジークハルトの表情に少し、笑みが浮かんでいた。

しばらく何も言わずに、ただ答えを待つた。そして時間もからず、リアンは翠の瞳を開いて、ジークハルトの顔を嬉しそうに見上げる。

「最初から、増える重さ、質量を考えてつづまつー。」「正解だ。やることはわかったな？」

「あい！」

リアンが元気よく手をあげる。だが向かいに座るお密は、首を傾げるばかりだった。

「……えーと、どうこうことかしい」「うるさいわね」

「へえ、レティーナは分からなかつたのか？」

「うるさいわね」

隻眼の女剣士が、思いつきり眉をひそめていた。剣呑な気配を滲ませた様子に、リアンが怯えて机の下に隠れようとすると、ジークハルトがニヤリとして、その背中を掴みあげた。

「隠れてんじやねえ。説明してやれ」

「あ、あいつ。えーと、えー…………。し、しょお~~~~~つー。」「おまえな。密に説明すんのも大切な仕事だぞ」「うつて~~~~つー。」「

泣きつくりアンをあしらいながらも、店主はどこか楽しげだった。  
「つまり、このアーティファクトはもともと、【魔石】を組み込む  
予定で考案されてたわけだ。ただし、肝心の【魔石】に力を込め  
ざると、テンプを調整する部分が重くなり、回転数がズレてくれる。  
そうなると時計として使い物にならない。元来の道具が正しく力を  
發揮しないと、【魔】の概念も発動せず、【魔石】に付与された【  
速度上昇】の効果も失われる訳だ」

一息つき、すっかり冷めたマグの中身を煽った。

「で、こいつの場合は、長年の使用で【魔石】に封じた概念の付与  
が薄れてる。歯車を回転させるテンプ調整部に重さが足りず、勢い  
がつけられないわけだ」

「いいわよもう。ようするに、修理しないといつか止まってしまう  
わけでしょ」

「ま、平たく言えばそうだな」

レティーナの、明朗解決な答えに苦笑する。

「ただし、適当に同じ大きさの【魔石】に変えてダメだ。込めた  
【魔】のバランスが正しくなけりや、コイツは機能しない  
「はいはい。つまり【魔】と時計の双方に熟知している職人が必要  
で、ここには、その職人が揃ってるわけでしょう?」  
「そういうこつたな」

ジーハルトは言って、分解した部品を集めたトレイを、リアン  
の前に置いた。

「どうだ、直せそうか」

「あい、できまう」

小さな両手の、小さなひとさし指。

トレイの上に乗った【魔石】をはめた部分に、ちょこんと触れた。  
すう、と息を吸い込んで、言葉を発する。

『【精靈】を知る我、命ず。』

摩擦係数を鉄より有し、対象となる道具の強度を上昇。

炎から【炎】を生成する。鉄と化合し熱量を上昇せよ。その数値は『』

リアンの口からこぼれるのは、複雑怪奇な『呪文』だった。

「ジグ、この子……」

「まあ見てろ」

『 数値の設定が完了』。

続けて回転を促す力の象徴を【風】 および媒介とする色は【翠】 と銘じる。

精神を司る精靈と接続し、化合せよ。

複合条件による言語定義は【時空】 と称する。

道具は、人に使えるべき物なり。望まれるならば、それに応えるべき物なり』

リアンの口から、流れる水のように、言葉の奔流が押しよせる。ジークハルトの片眼鏡越し、様々なイメージを放つ色と光が見えていた。

そして小さな指先から、【魔石】の中へと流れ込んでいく力を、黙つて見送っていた。

『以上、ここに定義を決定する。> 属性付与・再起動 <』

呼応する。

翠色の【魔石】のなかに、溢れていた光が吸い込まれた。リアンは閉ざしていた瞳を開いて、ぱあっと花を咲かせてみせる。

「できまひた～つ！」

「よし」

ジークハルトは、部品を乗せたトレイを寄せて、分解した懷中時計を元の状態に組み合わせていく。それもまた、見る者にとっては

魔法のような手際の良さだ。指先で拾えないほどにバラバラになつたパーツが、決められた位置に収まって、元通りに形成する。

「完成だ」

そして最後に、元に戻つた時計のゼンマイを巻く。時刻を合わせると、

力チ、コチ、力チ、コチ。

時計が規則正しく動きだす。さうこは、懐中時計の全体から翠色の光が浮かびでた。

「質は保証するぜ。恐らく効果もあがつてゐはずだ」

「え、ええ……」

レティーナが、まだ驚いた様子で懐中時計を受けとつた。時計を耳に添えて、その音色を確かめるような仕草をした後に、

「……懐かしい音が、聞こえる……」

隻眼の施されていない側の瞳を細めて、微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0340z/>

---

アイテム鑑定士の業務内容

2011年12月1日14時50分発行